

令和6年 第4回 臨時教育委員会 会議録

日 時	令和6年8月2日（金） 10時00分～16時40分
場 所	阪南市役所 3階 全員協議会室
出席者	<p>〈教育委員会〉</p> <p>教 育 長                    中 野 泰 宏          教育長職務代理者        八 田 三 紀          委                    員        辻        雅 之          委                    員        水 島 浩 子          委                    員        柴 崎 一 也</p> <p>〈阪南市立義務教育諸学校教科用図書選定委員会〉</p> <p>教科用図書選定委員長        神 藤 直 樹          教科用図書選定副委員長        石 原        慎          教科用図書選定委員            中 山 孝 一</p> <p>〈事務局（生涯学習部）職員〉</p> <p>生 涯 学 習 部 長            森 貞 孝 一          生涯学習部副理事            丹 野        恒          学校教育課長代理            鈴 木 恒 一</p>
書記	学校教育課長代理            鈴 木 恒 一
傍聴者	10名

## 会議の要旨

(教育長)

令和6年 第4回臨時教育委員会を開会する。  
署名委員に八田教育長職務代理者を指名する。

### ◆議決事項第1号「令和7年度使用義務教育諸学校教科用図書の採択について」 (学校教育課)

(教育長)

議決事項第1号 「令和7年度使用義務教育諸学校教科用図書の採択について」を議題とする。生涯学習部長から、議案の説明を求める。

(森貞生涯学習部長)

議決事項第1号令和7年度使用義務教育諸学校教科用図書の採択について説明する。

まず、小学校の令和7年度使用教科用図書については、令和6年3月29日付、文部科学省通知「令和7年度使用教科書の採択事務処理について」より、令和5年度に採択したものと同一の教科書採択しなければならないこととされており、現在小学校で使用している教科用図書を、ご採択いただくことになるので、後程確認のうえ、採択をお願いする。

続いて、中学校の令和7年度使用教科用図書の採択については、調査、研究を行った選定委員会より報告を行う。

(教育長)

選定委員会からの報告を求める。

(選定委員長)

阪南市立義務教育諸学校教科用図書選定委員会選定委員として、阪南市教育委員会より委嘱を受け、4回の会議を通して調査研究を行った。

第1回は、令和6年5月10日(金)に開催し、選定の方法、期間、観点、守秘義務等について確認した。また、同日調査員に採択及び、調査等について説明し、調査を開始した。

第2回と第3回は、令和6年7月4日(木)と5日(金)に開催し、各種目の調査員から調査研究の報告を受けた。

第4回は、令和6年7月16日(火)に開催し、各調査員からの調査研究報告と、各学校からの調査研究報告も考慮したうえで、本市の子どもたちにとってどの教科書が望ましいのかということを中心に据えて話し合いを進めた。そして、全種目において、本日推薦する教科用図書、教科書発行者について最終確認を行った。

次に、調査研究及び検討する際の項目を示す。調査研究につきましては、資料にある通り、「1. 内容の程度」、「2. 組織配列」、「3. 人権の取り扱い

い」、「4. 学び方の工夫」、「5. 補充的な学習、発展的な学習」、「6. 1から5に該当しないこと」の6つの観点で行った。

また、令和6年3月29日付、文部科学省通知「令和7年度使用教科書の採択事務処理について」の「2. 採択にあたっての留意事項について」のうち、「(3) 採択する際の検討のあり方について」に記載の2点についても留意した。

1点目は、「学習者用デジタル教科書の考慮について」である。通知には、「教科書採択は、紙の教科書を決定する行為であり、調査検討の対象は、紙の教科書であることが基本であること」とある。「一方で、令和6年度以降、英語のデジタル教科書を紙の教科書と併せて提供する予定であり、令和6年度の中学校英語の教科書採択については、中学校英語のデジタル教科書を調査し、考慮の1事項とすることができること」とされている。

これを受け、外国語に関しては、デジタル教科書についても、見本が提供されているため、調査研究の対象とし、採択に向けた検討材料の1つとしている。

また、「調査・研究の対象は紙の教科書であることが基本」との通知に基づき、英語以外の種目の各教科書の2次元コードについては、その配置や数、内容については一定調査したものの、デジタルコンテンツの内容の充実度合いについては、調査研究の対象としていない。あくまで紙の教科書の内容を見て判断するというスタンスで、選定委員会では協議を行った。

続いて2点目は、「ユニバーサルデザインに関する配慮について」である。通知には、「障害その他の特性の有無にかかわらず、児童生徒にとって読みやすいものであることが重要であることから、各教科書発行者において、教科書のユニバーサルデザイン化に向けた取組が進められているところである。各採択権者においても、教科書の採択に係る調査研究にあたっては、教科書が障害その他の特性の有無にかかわらず、児童生徒にとって読みやすいものになっているかどうかについても、比較検討することが望ましい」とあることから、調査研究の際には留意している。

この2点も踏まえ、調査研究したものを、この後、国語から順に1種目ずつ報告する。報告後、質問等を受けたのち、1種目ごとに採択を求める。

なお、報告にあたっては、説明の順は、教科書発行者番号の若い順番に説明を行い、教科書発行者名は略称を使用する。

(教育長)

はじめに国語について、選定委員会からの報告を求める。

(選定委員長)

国語よりご報告する。国語は、東書、三省堂、教出、光村の4者について報告する。東書は、教材のはじめに、作品の内容や課題について、キャラクターの吹き出しでわかりやすく表現していることや、全体的にやさしい色使いで、見やすいことなどの推薦点があった。一方で、キャラクターの会話が多いこと

で、逆に考えに偏りを生じさせる可能性もあるとの指摘もあった。

続いて三省堂は、現在中学校で使っている教科書である。はじめに、練習になるような短い説明文があり、そのあとに、同じ読み方ができる長編の説明文があり、系統立てて読める工夫がされているなどの推薦点があった。また、課題点としては、文法に関する説明が簡単であり、問題も少ないなどが挙がっている。

教出は、1年生の教材で、比較的新しいものを取り入れ、明るい印象であることや「四季のたより」は、触れる機会の限られる古典や詩的表現などに、年間を通して定期的に触れることができるといった推薦点がある。一方、3年生で、「論語」ではなく、「漢詩」を扱っているところに違和感があるといった課題点があった。

最後に光村は、SDGsと教材との関連がわかりやすく示されているなどが推薦点である。一方で、文字の色が薄く、線も細いという課題がある。

各者の調査、研究報告については以上である。

(教育長)

ただいまの報告についてご質問等はないか。

(教育長職務代理者)

この4者に差があるのかどうか、教えてほしい。

(選定委員長)

選定委員会としての推薦順としては、東書、三省堂、光村、教出の順である。東書とそれ以外には差があると考え。以上である。

(教育長)

阪南市の子どもたちにつけさせたい力を考えたときに有効な教科書はどれか。

(選定委員長)

例えば、東書の「日本語探検」というコーナーでは、キャラクター同士の会話形式になっているところが多く、調査員からは、キャラクターを有効に活用し、生徒にとってとっつきやすいものとなっているという意見があった。選定委員会でも、会話形式での表記については、疑問や問題点をディスカッションして、理解を深めていくような活動につながると考え、今後子どもたちが、そのような活動ができるようになる力をつけてほしいという思いから、有効なものであると考えている。

(教育長職務代理者)

学校調査では現行の三省堂の方が評価は高いが、選定委員会の推薦順位は、1位が東書、そして2位が三省堂である。なぜそう考えるのか、少し詳しい説明を求める。

(選定委員長)

調査研究のポイントとして、イラストやカット、文字の見やすさ、具体的な例題や問題量なども含め、生徒が「何だろう」と興味を持ち、「やってみたい

なあ」という意欲が出る教科書かどうかを重視した。

東書は、中学生のキャラクターを使って、学習の見方や考え方に気づかせるようになっている。この内容が、中学生の気持ちや考えに寄り添ったものであると、評価が高かった。また、東書は、各教材の後ろにある。「てびき」が丁寧で作られており、学習の進め方がわかりやすく、生徒1人でも学習することができる。これにより、自学自習ができるため、通級指導や少人数での学習場面でも有効であり、生徒が意欲を持って学習できる教科書であると考えた。

一方、三省堂は現行の教科書で、馴染んでおり、使いやすい他、説明文の単元では、初めに短い文章で、文の組み立て構成などの着眼点を押さえたうえで、長文で学習するという流れがよい点である。

しかし、東書の中学生のような親しみやすいキャラクターに対して、三省堂は、〇〇レンジャーのようなキャラクターを用いており、面白みはあるものの、東書の方が、生徒が興味を引かれ、意欲を持てると考えた。調査員からは、例えば、それぞれの色のレンジャーに「思考」や「比較」などと設定し、「ほら、赤レンジャーだから考えてみよう」とか、「青レンジャーだから比べてみよう」というように使えらると、生徒にもわかりやすく、よかったと思うが、そうっていないという意見があった。

(辻委員)

この中で阪南市の中学生に適しているという観点からの推薦点について教えてほしい。

(選定委員長)

国語の面白みの1つとして、行間の思いを感じながら、しっかりと読み込んでいくということがあると考え。そのために生徒が読んでみようと感じる見やすさは大切な点である。全体的な色使い、ルビなどの工夫から、東書の教科書は阪南市の子どもにとって適していると考え。また、どの教科書にも、行数の表記があるが、そこにも着目した。

1年生の教科書を例に説明する。東書の80ページ、三省堂の251ページ、光村の198ページ、教出の56ページを例に見る。すべて上下2段に文章が書かれているところであるが、教出は、文章の間に行数表記がある。三省堂と光村は、上段、下段ともに、5、10、15…と行数が示されている。東書は、上段が、5、10…となっており、下段は、20、25…というように、上段からの続きで表記されている。学習の場面において、「何ページの何行目を読みましょう」とか、「何ページの何行目にラインを引きましょう」などの指示は、比較的たくさんある。東書以外の教科書では、何ページの上段の何行目ということになるが、東書では、1段で記載されている文章と同じで、「何ページの何行目」という指示で済む。多様な子どもがいる中で、説明の言葉が1つ増えるだけでわかりにくくなることもあるため、説明はよりシンプルにできる方が良く考える。細かいところではあるが、実際の授業の場面を想定して、行数の記載にも配慮されている点で、東書は阪南市の子どもに適して

いると考える。

(柴崎委員)

教材の質や内容に関して、今、上位に考えている東書、三省堂の2者について、調査員からどのような意見があったか。

(選定委員長)

質的なものについては、特に大きな差はないと聞いている。それぞれに良い点、悪い点があるというような感じで説明を受けている。

(選定委員)

すべての教科書は検定を通過しているので、中に収められている作品そのものの質というのは、作品の内容が違って、どこも同じような程度でそろえられていると思う。基本的に国語の授業の場合、中に収められている作品そのものを教えるというよりも、その作品を通じて、読み方や書き方、話し方という、そういった力をつけるための1つの材料として作品を扱うので、作品そのものを教えていくという観点ではなく、その作品を使って、様々なことを考えさせていくという意味では、どの教科書の内容も、大きな差はないというふうに感じる。東書の全体的なバランスのとれた部分が、阪南市の子どもたちには適しているのではないかと感じる。

(教育長)

それでは、国語について採択する。改めて選定委員会から推薦する発行者はどこか。

(選定委員長)

選定委員会として、最も推薦する発行者は東書で、次に三省堂である。

(教育長)

採択する教科書は、東書でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、国語の教科書は東書とする。

続いて書写について、選定委員会からの報告を求める。

(選定副委員長)

書写については東書、三省堂、教出、光村の4者について報告する。

まず、東書は、「生活に広げよう」という単元があり、身近なもので親しみやすいなど、細部にこだわりを感じる。また、手紙の書き方などを丁寧に扱っており、卒業後も長く持つことができる教科書であるといった推薦点がある。ただ課題点としては、毛筆書写の課題が難しいということが挙げられている。

次に、三省堂は、現在中学校で使っている教科書である。資料のサイズやレイアウト、色使いが見やすく、全体的にまとまっていること、毛筆で書体を学び、硬筆で定着させる流れが良いことなどの推薦点がある。一方で資料が別立

てとなっており、使いにくいのではないかという課題もあった。

続いて教出は、写真や資料が多く、本書に沿って学習することで、各学年で日本文化に触れられるような工夫がされているといった推薦点が挙げられた。一方で教科書が大きく、習字道具の横に置いて使うには、使いづらいのではないかという課題点も挙げられている。

最後に光村は、写真や絵図が大きく、デザインで目を引く教科書であること、「季節のしおり」というコーナーでは、俳句や短歌などに触れることができることといった推薦点がある。ただ、書く量も含めて全体的にボリュームが多すぎるのではないかといった課題も挙げられている。

各者の調査、研究報告については以上である。

(教育長)

ただいまの報告についてご質問等はないか。

(教育長職務代理人)

国語と書写で違う発行者の教科書になっても問題ないか。

(選定副委員長)

どの発行者のものも、手紙や原稿用紙の書き方、また古典の取り扱いなど、内容については、国語とのつながりに関して、大きな差はない。また、基本的に書写は書写の時間、国語は国語の時間で指導するので、国語の教科書と同じ発行者のものではないといけないということはないと考える。

(教育長職務代理人)

日常に役立つ書式などについては、各者特徴があると感じたが、生活や日常に即して、できることを増やすことにつながるの、どの発行者のものか。

(選定副委員長)

例えば、生活や日常に即したのものとしては、手紙やはがき、また送り状などの書き方というところが出てくる。まず東書の22ページからと巻末の書写活用ブック、三省堂の78ページから、教出の108ページから、光村の110ページからにそれぞれ取り扱われている。生徒が日常生活の中で必要な内容について、学べるようになっている。取り扱っている内容については、東書、教出が非常に豊富である。また東書は、書く機会が多いお礼状を自分で考えて書けるように工夫されているのが良い。

三省堂は、66ページ、67ページに学力テストの問題のページ、103ページにその解説のページがある。そこで、実際に全国学力学習状況調査で出題された書写に関する問題が取り上げられている。この課題については本市の子どもたちも得意ではないため、このページの学習は効果的なものであると考える。文字のバランスや行書の特徴について、思考力を働かせながら学習に取り組めるという点において、子どもたちのできることを増やすということにもつながるものであると考える。

(水島委員)

お手本として使いやすいのは、どの教科書か。

(選定副委員長)

選定委員会でも、毛筆に取り組む際の手本の大きさという点については議論になった。まず東書には原寸大の手本がなく、三省堂と教出にはそれで1つずつある。光村については、原寸大の手本が多く掲載されている。三省堂の17ページの「天地」は原寸大になっている。光村は、原寸大の手本が比較的多く載せられている。運筆についても光村は手本内に示されていて使いやすいという意見もあった。

ただし、この点を議論していく中で、実際に授業をしている調査員からもタブレットなどを使って拡大して見ることもできて、近年書家の方々もそのような使い方をしているというような話もあった。

お手本としての使いやすさについて、大きさは各者、大きな差がないという判断である。

(柴崎委員)

選定委員会としての推薦順、阪南市の子どもたちに、この発行者のものが適しているというものはあるか。

(選定副委員長)

どの発行者も内容にこだわっており、大きな差はない。その中でも、硬筆の練習の充実度や情報が適度に見やすい点、全体的にまとまっていて、課題点が少ないという点では、三省堂である。

また、手紙の書き方等日常でのつながり、将来的にも使用できるぐらいの充実度という点では東書である。

光村については、毛筆の手本としては、最も指導に活用しやすい教科書だと言える。どの発行者についても、甲乙つけがたい状況であるが、その中でも、三省堂だけがすべての活動内容に対して、「～をすることができましたか」という注意事項が示されており、これは、先述の全国学力学習状況調査の問題を取り上げていることと同様、生徒が書写に対して、しっかり自分の考えを持って取り組むうえで、非常に有効である。この点から考えると、三省堂が1位、次に東書の順になると考える。

(教育長)

それでは、書写について採択する。改めて選定委員会から推薦する発行者はどこか。

(選定副委員長)

選定委員会として、最も推薦する発行者は三省堂、次に東書である。

(教育長)

採択する教科書は、三省堂でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、書写の教科書は三省堂とする。

続いて地理について、選定委員会からの報告を求める。

(選定委員)

地理については、東書、教出、帝国、日文の4者について報告する。

まず、東書は、現在中学校で使っている教科書である。写真については、従来の教科書よりも増えていて見やすくなっており、生徒の興味・関心も高まると感じられる。また、「気候区分のところでは、それぞれの気候帯とその特徴が見開きで全部説明されていて、非常にわかりやすいと感じた。移民問題や貧困などについても、見開きで大きく取り扱われており、人権の諸課題について丁寧に触れられている。

次に、教出は、導入のページなどで写真が多く使われており、SDGsと結びつけて表示されている。写真資料については、生徒に親近感を持たせるものが多く、興味・関心を引き出すものだと感じた。ただ、文章表現に難解な部分があり、生徒が使用することを考えると、肝心な部分が少し理解しにくいのではないかとこのように感じられるところがあった。それに地図やグラフの色合いは、やや見づらいという意見も出ていた。

次に帝国は、見開き1ページ分の情報量、知識量、グラフの見やすさなど、バランスが一番とれている教科書である。また、148ページに、南海トラフについての解説があり、ハザードマップの活用の仕方の記述もあることから、防災学習とのつながりをもった授業展開が可能である。写真資料が、他者に比べ大きくはっきり写っているものも多く、見やすくインパクトがあるので、生徒の興味・関心を引く効果が期待できる。

最後に日文は、ウクライナの問題や、フェアトレードなどにふれているのが特徴である。ただ、単元ごとの問いは広く浅いという印象を持った。また、時差の計算や緯度経度はイギリス中心の地図があった方が、伝えやすいとも感じた。

(教育長)

ただいまの報告についてご質問等はないか。

(水島委員)

どれも本当に工夫が凝らされていると感じた。選定委員会で選んだ上位の教科書について、その良さについて教えてほしい。

(選定委員)

どの教科書も中身が非常に充実していて、特に興味を示す部分がたくさんあると感じる。その中でも東書と帝国の2者と、教出と日文の2者とでは、使いやすさや生徒の活動内容などの観点において若干の差があり、東書と帝国の2者が優れているのではないかと感じる。

東書は、「導入の活用」というページがあり、導入に使える写真や課題が非常に充実していて、生徒の自主的な活動を促す工夫がされている。世界地理の単元では、「食」を共通のテーマとして内容がたくさんあり、生徒の興味を引きやすくなっている。また、資料の部分と、本文の部分の背景が色分けされて

いて、非常に見やすくなっているのもよい点である。

次に、帝国は、地図や資料の色合いが見やすく、ユニバーサルデザインの観点からも優れていると感じる。また、272ページ、アイヌ民族についてのページや、またアパルトヘイトについてのコラム、朝鮮半島の歴史と日本との関係などについての記述が充実しており、人権問題について、生徒が自主的に考えられるような工夫が随所にされているなというふう感じた。

(水島委員)

推薦される上位2者の課題点があれば、詳しく教えてほしい。

(選定委員)

まず東書の課題点として、従来、「混合農業」という言葉が一般的に使われていたが、その「混合農業」という言葉が記載されていないことで、指導者側からは、少し指導しにくいことや、全体的に若干の物足りなさを感じるという意見があった。例えば、他の教科書では取り扱っている重要語句の中で、記載されているものが東書の教科書にはないとか、発展的な学習をするための具体的な材料が少ないことなどが挙げられる。また、25ページの時差の求め方についても、少し煩雑でわかりにくいのではないかと、写真や表などの資料の数は多いが、説明文が難しく、もう少し簡単な表現で書かれている方が、よりわかりやすいのではないかと報告も受けている。

帝国の課題点として、調査員から挙げたのは、用語解説のページがないという意見である。また、国や都道府県ごとの人口や面積などの統計資料がないということも、課題の1つだと挙げられている。

(教育長職務代理者)

上位2者と、その他2者では差があることはわかったが、この上位2者の間に差はないのか。あれば、どのようなところがポイントになるのか、説明を求める。

(選定委員)

例えば、東書の84ページ、85ページのように、テスト等を考慮した場合、中学校の1時間の授業で大体この見開き1ページを1時間の授業で指導すると考えて、内容が物足りないと感じる箇所がいくつかある。帝国は、そういったところがない。

加えて、帝国の場合は、関係項目を同時に学べるような構成になっていて、指導者も比較的教えやすく、生徒も理解しやすいと感じる。他にも帝国では、36ページ、37ページで、寒帯と冷帯の気候帯の内容を1時間でまとめて学習できるような構成になっている。それに対して、東書は、36ページから39ページに、構成的には「寒帯で1時間」、「冷帯で1時間」という形に分かれているので、学習の進め方にもよるが、生徒にとっても、量的な部分とかバランス的な部分で学習しづらいと感じる。

(教育長)

生徒が主体的に活動するということを考えたときに、ここが優れているとう

箇所があれば、もう一度教えてほしい。また、地理を通して生徒につけさせたい力や、主体的な活動を促す工夫の観点で、帝国が優れているという点があれば教えてほしい。

(選定委員)

帝国の巻頭のページの9ページに、この教科書全体を通じて考えていくためのウェビングマップやマトリックス、思考ツールの使い方などが示されており、生徒にとっては、自分の考えを整理する方法がとてもわかりやすいと感じた。これをもとに、ただ覚えていくのではなく、いろいろと考えを広げていく学習を、常に意識しようというようなところが示されている。

東書ではそのような観点が少ないように思う。その視点でも、帝国の教科書が、阪南市の子どもたちにとっては適していると考えている。

(水島委員)

人権や防災という視点で見たときに、この2者には大きな差があるか。あるとすればどのような点か。

(選定委員)

どちらも当然防災のことについては記載されているが、まず帝国では150ページ、151ページに自然災害とかハザードマップだけでなく、202ページ、203ページの近畿地方を扱っている単元で、高波のことや、阪神淡路大震災も絡めて学習できるような構成になっている。後に起こり得る可能性がある南海トラフのことについての学習を独自に進めていく必要があるかと考える。そのうえで、近畿地方を学ぶ単元で、こういった防災のことや地震のことを扱っているという点では、非常に身近なところで、自分たちの地域と、そして防災のことを絡めて学習できるという点で、優れていると感じる。

東書にはその視点での記載がないので、帝国の方が、より阪南市の子どもたちには適していると感じる。

(柴崎委員)

この上位の2者だけでなく、今やはり地理と言えば、日本の領土に関するところが、大きな国際問題になっているかと思う。子どもたちにどのように伝えるのかという観点では、東書と帝国について、その内容等についてはどうか。

(選定委員)

どちらの教科書も極端に偏っているといったところはない。あとは指導者がどのような思いで、どのように子どもたちに伝えていこうという姿勢を持って、授業に臨むのかということにかかってくると思う。そういった点で、どちらかは、どちらかに偏っているので具合が悪いというような問題点はないと感じている。内容の量も大きく変わらない。

(教育長)

それでは、地理について採択する。改めて選定委員会から推薦する発行者はどこか。

(選定委員)

選定委員会として、最も推薦する発行者は帝国、次に東書である。

(教育長)

採択する教科書は、帝国でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、地理の教科書は帝国とする。

続いて歴史について、選定委員会からの報告を求める。

(選定委員長)

歴史は、東書、教出、帝国、山川、日文、自由社、育鵬社、学び舎、令書の9者があるが、学び舎については、調査するのに十分な冊数の見本本が届いておらず、調査研究を行っていないので、学び舎以外の8者について報告する。

まず、東書は、19ページにプレゼンテーションソフトで、スライドにまとめる手法について記述されており、ICTの活用や授業づくりがしやすい工夫がされていること、見方考え方のフィードバックが歴史の年代で分けられていること等の推薦点があった。課題点としては、156ページの「アヘンを吸う中国人」の絵は中学生にとって中国、或いは中国の人々に対する誤解を招きやすいという意見があった。

次に、教出は、236ページ、237ページの「危機に立ち向かった人々」では、震災やパンデミックの恐怖やそこから学んだ教訓が示されており、生徒たちの関心が高まること、身近な地域の歴史を調べるといったコラムの記事では、学習内容と自分たちの生活とのつながりを考えさせるようにしていることといった推薦点があった。一方で、倭寇やアイヌを取り扱う単元では説明が不十分で、人権的な部分で課題があるといった指摘もあった。

次に、帝国は、現在中学校で使っている教科書である。70ページの欄外に鎌倉時代の始まりについて諸説あることに触れている。102ページで、年表と見比べながら、海外との関係やそれ以外の社会の様子について分けて整理ができ、その章をまとめやすい形になっているなどの推薦点がある。一方で振り返りカード作成を指示しているところがあり、事業者としてはまとめにくく評価しにくいいため、指示する必要はないといった課題点も挙がっている。

次に、山川は、古代の内容は当時の文化生活や文化を学習できる興味深い内容が多く、また近來の戦争に関する内容が詳しくまとめられているといった推薦点がある。一方で、一度歴史を学んだ者にとっては面白い読み物であるが、中学生が授業で取り組むには消化しきれない量であるという課題もあった。

次に、日文は、各章のはじめに設けられている大きな資料は、単元の時代的特徴がわかりやすい年表と地図も併せて記載されているので、時代の流れ、国や地域の関係性が視覚的に学習できるといった推薦点が挙げられている。一方で1つの単元に見開き2ページを使っている部分が多く、中央に本文、周囲に資料や図版を配する体裁になっているが、片側1ページがすべての資料や図版

という部分もあり、ややデザインの統一性を欠いているという指摘もある。

次に、自由社は、22ページ、23ページなど、イラストがあたたかみのあるデザインになっているという推薦点があった。ただ、「命脈」など中学生には難しい言葉が多く使われているなどの課題点もある。

次に、育鵬社は、「なでしこ日本史」というコラムで、各時代に活躍した女性を取り上げて、その役割の重要さが理解しやすいこと、また、人物や写真が写りもよく丁寧に取り上げられているという推薦点があった。162ページの「アヘンを吸う清国人」や、121ページの「えた・ひにん」という表現は誤解を生みやすく、人権的な配慮という点で課題がある。

最後に、令書は部分的に詳しい資料があるという推薦点がある一方で、160ページから163ページのアイヌ人の記載で、「DNA」や「縄文人の血統を受け継ぐ」など、人権的な配慮に欠ける記載が見られるといった課題もあった。

(教育長)

ただいまの報告についてご質問等はないか。

(水島委員)

それぞれ個性があると感じたが、選定委員としての推薦順位を教えてください。

(選定委員長)

選定委員会として推薦する順番は、東書、帝国、日文の順である。東書と帝国の2者は僅差で、日文とは差があるというふうに考えている。

(教育長)

説明の中でも人権的なことに触れていたが、最近の問題の1つでもあるジェンダー等について、この3者の取り扱いはどうか。

(選定委員長)

まず東書においては、「学びを広げ、より深い学びにつなげるコラムコーナー」で、全体的に人権についての学習内容を、複数の資料とともに、詳しい解説を載せていることで、生徒に歴史に対する興味を持たせ、発展的な学習を促す工夫がなされている。

7ページに目次があり、どの「学びを広げ、より深い学びにつなげるコラムコーナー」につながっているかが載っている。

帝国においては、93ページに、コラムで女性の権利についても触れ、立場が軽視されない配慮がされていたり、他でも人権についてコラムや特設記事が丁寧にまとめられたりしている。

日文は、民族、身分、女性などについての差別を細かく取り上げ、全体として人権問題への配慮が見られる。9ページに琉球王国とアイヌ民族の記載がある。177ページに身分制度の廃止や市民平等、人権や身分制度の形に触れている。

(教育長職務代理者)

歴史的に見て、最新の内容や、反対に古い内容等についてはどうか。

(選定委員長)

最新の内容という点で言うと、東書の265ページで、第7章「現代の日本と私たち」の中で、持続可能な開発目標（SDGs）を取り上げ、現代的な諸課題をとらえ、その課題解決に向けた学習展開が示されている。

(柴崎委員)

社会科の教科書で文化の面で、海外の写真や彫刻の写真、統計的なことというグラフ等が非常に重要になってくるかと思うが、資料の量や配置、見やすさについて教えてほしい。

(選定委員長)

まず東書は、1つの授業で取り扱う写真や図、グラフ等が豊富に載せられており、生徒の興味を高め、理解を深める資料となっている。調査員からは、86ページ、87ページが特によかったというような評価があった。ただ、写真が全体的に鮮明さに欠けるものも多いという指摘もあった。

次に帝国は、写真、資料、文字、イラスト等がバランス良く配置されており、複数の資料を読み取り、考察させられるようになっている。特に44ページから47ページは、そのような活動をさせやすいという調査員からの報告もあった。

続いて日文は、各章のはじめの大きな資料は、その単元で学習する内容の読み取りや時代の特徴がわかりやすくなっている。また177ページの6番の資料は、明治政府のメンバーの顔写真が入っていて役職と人物の関係性がよくわかり、理解が深まるとの評価であった。

(柴崎委員)

歴史や地理等、それぞれの分野のつながりを意識した教科書という点について、調査研究の中での意見等があれば教えてほしい。

(選定委員長)

各者とも、そういう点も工夫がされていた。ただ、質問の内容については、授業者の裁量や授業のあり方によってカバーしているということになるかと思う。

(教育長)

一番に推薦するのが東書、帝国が僅差で、次に日文ということで、3者についての説明を聞いたが、東書と帝国についての推薦理由についてももう少し詳しく教えてほしい。

(選定委員長)

やはり一番の決め手は、調査員の報告にもあった、プレゼンテーションソフトでスライドにまとめる手法が取り上げられているという点である。本市でも、子どもたちが1人1台タブレットを用い、授業での活用を進めている中、子どもたちが自主的にソフトを使って表現できる活動ができる工夫が見られた。

単に重要事項を覚えるだけでなく、「歴史から何を学ぶのか」、「今後どう

生かしていくのか」という点で、どの発行者の教科書も工夫されている。その中でも、東書は子どもたちの活動につなぎやすい点で本市の子どもたちに、一番適しているのではないかと考える。調査員からの意見としても、東書の教科書は学び方について「探求的な問い」を扱い、子どもたちが自分で見返すことができるという意見もあった。授業におけるICTの活用、探究的な学習の推進という点で、東書を推薦する。

(水島委員)

中国の清のところで「アヘンを吸っている写真」や「えた・ひにん」とかそういう階級の話等は、歴史では必ず出てくる。最近の時代背景から見ると、差別的な表現等に対して非常に丁寧になってきているので、歴史的な背景があったことは、非常に大事なことで、それを知ることも大事かと思う。そういう意見は、選定委員の中でもあったか。

(選定委員長)

そのようなことは、もちろん大事にしなければいけない部分であるというのは十分認識している。実際学校でも歴史的なこと、人権的なことも含めて、学習していく中で、授業において、教科だけではなく、学習活動全体を通して学習をしていくという点は大事にしなければいけないというようなことは選定委員会の中でも意見は出た。

(教育長)

それでは、歴史について採択する。改めて選定委員会から推薦する発行者はどこか。

(選定委員長)

選定委員会として、最も推薦する発行者は東書、次に帝国である。

(教育長)

採択する教科書は、東書でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、歴史の教科書は東書とする。

続いて公民について、選定委員会からの報告を求める。

(選定副委員長)

公民は、東書、教出、帝国、日文、自由社、育鵬社の6者について報告する。

まず東書は、現在中学校で使用している教科書である。アイヌの人々に対する差別や部落差別、また、先住民に対する差別やハンセン病患者に対する差別、さらには障がいのある人に対する差別など、様々な人権問題について示されており、充実している。例えば60ページ、61ページの「18歳のステップ」など、選挙権を持つ年齢が18歳になったことで生徒が主体的に社会に参画する態度を育てる工夫がされている。

一方でLGBTQ+に関する記述がやや少ないのではないかという課題点が挙げられた。

教出は、公民の学習を始めるにあたってというところで、SDGsの中の目標が大きく示されている。SDGsの取組の記載が多く、各ページで取り扱っている内容に、ゴールの番号が標記されている。また性の多様性やメディアリテラシーについてなど、新しい人権の取り扱いが充実しているという推薦点もある。ただ、子どもたちの実情を考えると、全体的に内容が難しく、学習のまとめについても、子どもたちが振り返りとして使いづらいのではないかという意見もあった。

帝国書院は、LGBTQ+の記述が充実していると感じる。例えば49ページにLGBTQ+の解説がされているところがある。また単元ごとに写真が大きく掲載されていて、わかりやすい。生徒の興味・関心が引き出す工夫がされているという推薦点がある。ただ三権分立については、「三権の抑制と均衡」の説明が67ページ、86ページ、87ページ、97ページと複数ページにまたがっていてわかりにくく、授業もしづらいという課題点もある。

日文は、56ページと57ページに身近な例である堺市の施設を挙げられている。案内板やエレベーターのボタンに付けられている点字が実際に掲載されている点が良い。また、63ページには、防犯カメラについて、次の65ページ、66ページには、メディアリテラシーや情報モラルについてなど、いわゆる新しい人権課題に関する記載がある点が良いという推薦点があった。一方で各章の最後にあるまとめのページについてはやや使いにくいように感じるという課題点もある。

自由社は、各ページにある「やってみよう」での取組で、自分の考えを書いたり、タブレットを使って調べ学習をしたりできることや、各単元にある「アクティブに深めよう」というところでは、個人の学習にも、班活動にも活用できるといった推薦点がある。ただ人権についての取扱いが少なく、性の多様性など、新しい人権課題については触れられていないなどの課題点が挙げられている。

育鵬社については、世界の人権についてのコラムが詳しい、「やってみよう」はグラフ等があって取り組みやすいという推薦点が挙げられている。課題としては人権を取り扱う順番が基本的人権の直後になっておらず、学習しづらいのではないかといった意見もあった。

(柴崎委員)

公民の教科書を選ぶにあたって、最も大切にし、重要視したポイント何か。  
(選定副委員長)

調査員の調査で、「人権の取扱い」が最重要のポイントとして挙げられていた。選定委員会としても、とりわけ公民では「人権の取扱い」が大切であると考え協議を進めた。また、子どもたちが主体的に学習するという点からも、話し合いの活動などをさせやすい工夫がされているかということも、ポイントと

した。

(辻委員)

それを踏まえたうえで、6者の差というのはどういうところにあるのか。

(選定副委員長)

選定委員会としては、東書、帝国、日文、この3者とその他の発行者には差があると考えている。

まず、東書は、人権の取扱いが最も充実していると考えている。先述の様々な人権課題について示されている点や、コラムもあり、子どもにも理解しやすい内容を幅広く取り扱っている点、また、「未来にアクセス」では、子どもたちがこれからの社会を主体的に考えていく力を育てられる内容になっている点が推薦点としては挙げられている。

次に帝国も、この人権の取扱い等については高い評価であった。特にLGBTQ+に関しては、他者と同じく、基本的人権の学習で取り上げられている。それだけではなくて、73ページに、SDGsと関連して「ジェンダーギャップ指数」という形で触れられていて、内容が非常に充実しているというふうに考えている。

次に日文については、様々な人権課題に加えて、新しい人権課題にも触れ、考えさせる内容として充実している。ただ部落差別や在日外国人に関しては、先述の2者に比べて、やや物足りなさを感じるという指摘もあった。

(教育長)

地理、歴史、公民、地図4つの分野でそれぞれ発行者が違うことに関して影響はないか。

(選定副委員長)

この点については選定委員会の中でも話題に上がった。実際に授業を行っている調査員にも同じ質問をしたが、現行も発行者は統一されていないが、特に扱いづらいということはないとの意見であった。選定委員会では、社会科全体で発行者を1つに統一する必要性はないと考えている。

(辻委員)

公民の学習において、初めは現代社会の生活や文化を確認し、三権分立や政治・経済に関することを学んだあと、国際社会について学び、考えるという流れになると思う。世界的に見ても、戦争や紛争、政治的な対立等がある中で、子どもたちが主体的に考え、話し合ってもらいたいと思う。最終的に学習のまとめという部分で、各者の評価はどうか。

(選定副委員長)

意見の通り、まず日本の国内のことを学習していきながら、その視野を広げていく中で、国際社会のことを考え、どの発行者の教科書についても「国際社会と自分」という形で単元の最後の方に設定をされている。調査研究のポイントとしても、子どもたちが主体的に考え、話し合いの活動を取り入れながら学習できる教科書はどれかという観点も重視して調査を行った。上位3

者とも、学習の最後には、学んだこともしっかり振り返って、さらに発展的に考えていくという流れになっている。「国際社会と自分」という関わる部分でいくと、東書では210ページ、帝国についても同じく210ページ、日文は220ページが、まとめの資料になっている。各者ともシンキングツールなどを用いながら、問いを解決するような構成にはなっている。特に東書のクラゲチャートが、子どもたちに考えさせるうえで、非常に使いやすいのではないかという意見があった。また話し合う活動についても東書212ページの「はちみつの争い」は、学んだことを生かして考え、話し合うことのできる教材であるという評価であった。

(教育長)

それでは、公民について採択する。改めて選定委員会から推薦する発行者はどこか。

(選定副委員長)

選定委員会として、最も推薦する発行者は東書、次に帝国である。

(教育長)

採択する教科書は、東書でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、歴史の教科書は東書とする。

続いて地図について、選定委員会からの報告を求める。

(選定委員)

地図は、東書、帝国の2者について報告する。

まず東書は、表やグラフの配置が非常にわかりやすく、1ページの情報量が適量であるという意見があった。内容面では、113ページに「〇〇地方の資料」というようページが設定されていて、授業で活用しやすい資料が豊富にそろっているという意見があった。また、91ページ、92ページの大阪の地図には、大阪城やあべのハルカスなどのランドマークについて絵で表現されていて生徒も調べやすい工夫がされている。

次に、帝国は、現在中学校で使用している地図である。「地図で発見！」というコラムがあり、83ページには、南西諸島を「指でたどってみよう」など、地図を見ながら活動する内容がわかりやすく示されている。子どもたちが地図に興味を持って活動するという点で優れているという推薦理由がある。他にも、19ページの世界の文化の部分では、いろいろな国で、いろいろな家があって、その中での食事風景が記されている。生徒が興味・関心を持って取り組めるような工夫を感じた。また、東書と同様に帝国でも109ページ、110ページには、具体的な場所の名前や景勝地などの記載がある。135ページ、136ページでは、東京散策のランドマークが確認しやすいなど、関東方

面への修学旅行が中心の阪南市の子どもたちにとって、修学旅行での自分たちのルートや活動の場所等を確認するうえでも非常に活用しやすい地図であるという推薦理由があった。

(水島委員)

地理と地図で両方並べて使うことが多いと思うが、発行者が違うということに関しては、問題はないか。

(選定委員)

選定委員からも調査員に同じ質問をして、実際に授業で扱っている調査員からは、発行者が違って、記載されている内容は大体網羅されているので、特に困るということはないという報告を受けた。ただ、東書の場合、地理と地図で表紙の質感、図柄が非常によく似ているので、生徒が間違ってしまう可能性はあるとの意見もあった。

(教育長職務代理者)

地理の教科書だけではやはり不十分で、地図帳は必要なのか。

(選定委員)

そのことも選定委員会では、調査員に、意見を求めた。

地図は、中学校及び小学校の5、6年生ではすでに教科書として配付されてきたが、2020年から小学校3年生でも配付されるように拡大された。その背景には、高等学校での「地理」の必修化がある。従来であれば「地理」と「日本史」は選択制になっていて、「日本史」を選択した高校生は「地理」を高校で学ぶことがなかった。近年グローバル化が進む中で、地理的な知識や地理情報を活用する力の必要性が高まる中で「地理」の必修化というものに至った。それとあわせて、小学校3年生から地図を配付していくという経緯がある。そういう意味でも、地図を活用した学習は、グローバル化が進む現代社会において、より一層必要になっているし、地図では、自分たちの住む地域だけでなく、日本各地であったり、世界全体であったり、そういったことに関わる情報を知るという意味でも、必要であると考えている。

例えば、帝国の196ページには都道府県の記載があり、生徒にとって、県庁所在地を確認したいときに、地理の教科書だけでは県庁所在地まで記載されているところが少ないために、すぐにわからないが、地図を並行して使うことによって、一目で理解でき、場面によっては生徒にとって非常に学習しやすいというとの報告もあった。また、地図の読み方が掲載されているほか、地理への興味が高まる工夫もふんだんにされている。地図を活用して学習し、興味が高まることで、地理的な知識や地理情報を活用する力につながると考える。

(水島委員)

資料としては、東書の方が非常に細かく豊富だと感じる。一方で帝国は、どちらかという地図としての強みを前面に出しているという印象的を持つ。阪南市としてはどちらの方は、よりよいと考えているか。

(選定委員)

中に記載されている情報については、ほとんど差はないのかなと言える。表紙についての話もあったが、見たり、触ったりすると、帝国の方はまさに「地図」という印象で、子どもたちに地図を出す指示をしても、すぐに取り出せるイメージがあるのは、利点の1つであると思う。前回の採択時は、東書は、資料集的な要素・内容が非常に多かったが、今回、東書も、地図に強みを持っていた帝国の内容に寄せてきたと感じるという調査員からの意見もあった。

そんな中で、あえて2者のそれぞれの課題を挙げるとすると、帝国は、世界の国々の色分けをしている巻頭のページで配色の部分で、国と国名が見にくいと感じる。

東書は、156ページに統計資料があるが、グラフの色使いが、紫地に黒字で書かれているところが少し見にくいと感じる。あとは、全体を通して、難民問題や紛争などについての記載が若干、東書は少ないというような意見もあった。

(柴崎委員)

感想にはなるが、両者とも最後に説明があったような内容も含まれていて、自分自身の地図帳への意識が一変するようなものである。特に、帝国の35ページ、36ページの江戸時代の日本海において交流を考えているような発想が載っている。両者ともに素晴らしい地図帳であると感じた。

(選定委員)

調査員から報告を受ける中で、最近「地理が好きだ」という子は、地図を見るのではなくて地図を読むというような作業をしている。委員の意見にあったような部分を見ながら、自分の思いを馳せ、世界に広げていく子どもたちも実際育ってきているので、地図が発展していくということは非常に喜ばしいことである。ぜひ、子どもたちに最適な地図を採択していただきたいと思う。

(教育長)

それでは、地図について採択する。改めて選定委員会から推薦する発行者はどこか。

(選定委員)

選定委員会として、最も推薦する発行者は帝国、次に東書である。

(教育長)

採択する教科書は、帝国でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、地図は帝国とする。

〈休憩〉

(教育長)

数学について、選定委員会からの報告を求める。

(選定委員長)

数学は、東書、大日本、学図、教出、啓林館、数研、日文の7者について報告する。

東書は、章末問題が難易度によって分けられているのがよく、どの単元でも重要となる四則計算について丁寧に取り扱っているという推薦点がある。

一方で、1ページの文字数が多いという課題点も挙がっている。

大日本は、コラムが充実しているという推薦点がある。一方で、一次関数での変域の取扱いが薄く、また、章末問題の解説がないといった課題点がある。

学図は、計算問題が多く、問題の内容についても、応用や活用など難易度で細かく分けられていることや、素因数分解はやり方の説明だけでなく、約数の個数、最大公約数、最小公倍数にも触れられているといった推薦点がある。しかし、色使いにおいてオレンジの見た目がきつく、また、色を多用して逆に見にくくなっているという課題点がある。

教出は、入試問題を取り扱っていることや、章末問題の前に学習のまとめがあり、その章の大事なことがまとめられていて、数学が苦手な子どもにとっても、言葉を確認しながら振り返りやすいといった推薦点がある。一方で、各ページに生徒が取り組む問題に、「例」・「たしかめ」・「問い」の3種類があり、それぞれの番号につながりがないため、生徒にとっては、どの問題の説明がされているのかわかりにくいという課題点がある。

啓林館は、すべての例、例題に解説動画がついていて、支援学級や不登校の生徒に対しても活用できることや、問題の量が豊富にあるなどの推薦点がある。

一方で、連立方程式の解の書き方が、 $(x, y) = (○, △)$ となっていて、座標と混乱するといった指摘もあった。

数研は、現在中学校で使用している教科書である。分量、図などすべての要素で、1ページあたりの内容が適切な量となっている。また、他の教科との接点についてもわかりやすく取り扱われているといった推薦点がある。一方でデジタルコンテンツが少ないといった課題点がある。

日文は、見開き1ページで授業が完成する構成になっていることや、円周率 $\pi$ は空間図形に関わる文字だが、文字式として扱うこともあるため、文字式と関連付けて取り扱われていることが良いという推薦点がある。一方、次の課題やチャレンジ問題の答えが、ページ下に載っていることで、ページが見にくくなっているという課題点がある。

(教育長)

因数分解も含め、方程式等、発行者によって一部取り扱い順に違いがある。その点については、選定委員会で意見はあったか。

(選定委員長)

3年生の二次方程式の解き方について、東書の70ページ、啓林館の68ページ

の平方根の考えを使った解き方から解の公式、因数分解の利用になっているのが、扱いづらいという意見があった。他の発行者のものはすべて、二次方程式の解、因数分解を使った解き方、平方根の考えを使った解き方、解の公式の順で取り扱っている。単元全体の取扱いとしては、すべての発行者が因数分解を含む式の計算、平方根、二次方程式の順で取り扱っている。

東書、啓林館以外のものは、二次方程式の単元の中でも学習した順に取り扱

っており、生徒たちが理解するのに適していると考ええる。

ただ、問題の難易度や配置については全体的に見て、よく似た計算問題を取り

扱っており、発行者による大きな差はないと考えている。

(教育長)

教える順序というのは、結構違いが大きいと思う。今の説明で、最終的には大きな差はないということだが、数学も発行者数が多いので、ある程度順位等も考えながら、その差もわかるような部分についてもう少し丁寧な説明を求める。

(選定委員長)

選定委員会としての推薦の順位は、数研、東書、啓林館の順である。

まず、数研、東書ともに共通する点として、円周率 $\pi$ を「文字式」の単元で扱っていることが挙げられる。その他の発行者のものは、「円の周の長さや面積」で、初めて取り上げている。 $\pi$ は文字であるし、実態が割り切れない無限に続く数という側面もあるという性質を考えたときに、「 $2\pi r$ 」のように、数字と文字の間に $\pi$ を書く必要がある注意点を強調するのであれば、文字式で取り上げる方が良いと考える。さらに、数研は現在使用している教科書であるが、社会と数学のつながりについての取扱い等、コラムも充実しており、現行のものよりさらに良くなった点が挙げられる。例えば、数研1年生の258ページ、2年生の212ページのコラムでは、それぞれ、気象予報士やスポーツアナリストに聞いた内容が載っており、気象予報士の仕事やスポーツの世界と数学を関連づけて学ぶことができる。また3年生の142ページの「学んだことを活用しよう」に見られるように、数学で学んだことを、日常生活の中に生かせるような工夫も見られる。また、他教科とのつながりという点において、2年生の99ページ、一次関数の利用では、水の沸騰の実験を取り上げ、理科では「沸点が $100^{\circ}\text{C}$ であること」がねらいとなるが、ここでは数学的にグラフの解釈として使われている。また、1年生の158ページでは、社会科と関連付けて平面図形を考えることができる。

東書についても、1年生の186ページ、2年生の90ページのように伝統工芸や気象予報にも、数学が使われていることがわかるコラムが載っていて、

子どもたちに興味を持たせることができる。また、各章の扉のページの「考えてみよう」が子どもの興味を引く内容になっていて、主体的に学習に取り組む態度の評価材料としても有効であると考え。また、章末問題が、AとBと難易度ごとに分けられており、子どもたちに合わせて学習の定着をすることができる。

啓林館については、すべての例題に解説動画がデジタルコンテンツとして配置されており、自学自習に向いている。また、問題数も多く、バリエーションが豊富であることも推薦点である。

(教育長職務代理者)

啓林館は、解説動画としてのデジタルコンテンツの量が多いということだが、巻末付録として、立体の展開図などがついていないが、これについてはどのように考えるか。

(選定委員長)

付録にある立体を作成したり、実際に作ったり触ったりすることは意義のあることと考える。立体の展開図等の付録がついていることはプラスであると考えている。

(柴崎委員)

数研、東書、啓林館の3者の説明があったが、絞り込みをしていく中で、上位2者である数研と東書についてももう少し詳しく説明を求める。

(選定委員会)

取り扱う問題の内容については、各発行者大差はないというのは、先述のとおりだが、数研と東書を比較したときに数研は、各ページの例の横に項目がついている。

(事務局)

1年生の114ページにある「例3. 速さの問題と」というものがある。他のページでも例の横に「〇〇の問題」というふうになっている。

(選定委員長)

東書は例の横に項目がついていないところもある。項目がついていることによって何の問題をしているのか、わかりやすさの点で言えば、数研の方がすぐれていると考える。

(水島委員)

感想であるが、どの教科書も昔の時代と随分違って、気象予報士等、の職業や地理的なことなど、子どもたちの生活とつながりがある教科書になっていて、阪南市の子どもたちも含め、全体的に子どもたちに受け入れやすくなっていると感じた。

(教育長)

それでは、数学について採択する。改めて選定委員会から推薦する発行者はどこか。

(選定委員長)

選定委員会として、最も推薦する発行者は数研で、次に東書である。

(教育長)

採択する教科書は、数研でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、数学の教科書は数研とする。

続いて理科について、選定委員会からの報告を求める。

(選定副委員長)

理科について、東書、大日本、学図、教出、啓林館の5者について報告する。

東書は、現在中学校で使用している教科書である。今回の改訂によって、例えば、1年生の48ページから49ページなど、写真がすごく大きくなって、細かいところの観察がしやすくなっていると感じる。また、実験結果がすぐに分からない構成になっていることで、生徒に考えさせる工夫がされている。探求についても流れを確認する方法が見開きでまとめられているのも、生徒の活動を促すうえで良いと考えている。さらに、考察・レポート・議論・発表の仕方をコンパクトにまとめているということや、1年生の98ページのように、実験の方についても、別の方法も示されていることなど、より充実した内容になっていると考えている。

大日本は、実験の結果と考察がすべて文章で記載をされている。非常に丁寧な構成となっているが、中学生にとっては、ここまでの情報は必要ないのではないかという意見もあった。実際の実験結果より教科書を参考にレポートを作成してしまう可能性もあるという意見も出ている。

次に学図の教科書は、1年生の7ページ、45ページの「Can-Do-List」は、単元で押さえておきたいことがチェックリスト化されていて非常にわかりやすいという意見があった。ただ、全体的に写真の種類は非常に多いが、サイズがやや小さくて、細かいところまでは見にくいというふうに感じている。また実験が丁寧すぎて、生徒に考えさせたい場面で、結果やまとめが評価書に記載をされているため、子どもたちが思考する場面が減ってしまう懸念があるという意見も出た。

教出はUDフォントやふりがなの配慮がされていて良いと感じる。各学年の巻頭には、「探求の進め方」を配置し、学習をどのように進めていけば良いかということが示されている。これを見ることで生徒がいつでも確認をすることができる工夫がされている。また図版の方の配置も非常に工夫されており、見やすいと感じている。また、各章のはじめには、「学習前の私」と、そして終わりには「学習後の私」があり、科学的な答えが出せるようになったことを確認し、学んだことを実感できるような構成となっている。

啓林館は、実験観察がしやすいことや、その際、仮説を立てて設定しやすい

ことなどが特徴として挙げられる。コラムも非常に充実していると感じる。また各単元や各章の導入部分の写真についても、子どもたちが不思議に思うような現象や、興味深いものが写真として使われており、生徒の興味・関心を引き出せるような工夫がされている。

(辻委員)

それぞれの特徴はよくわかった。5者の中で、それぞれの間にもどれぐらいの差があるのか。

(選定副委員長)

生徒が実際の教科書を見てわかりやすいとか、授業や実験などで使いやすい教科書という点で言うと、教出と、大日本については、若干使いづらいつらいのではないかなと考えている。東書と啓林館が他の教科書をリードしており、学図との間にも差があるというふうに考えている。

(柴崎委員)

理科では、やはり生徒が実験をすることが大きな活動になるかと思う。実験の観点で見て、それぞれ上位3者のいいところ、あるいは課題について教えてほしい。

(選定副委員長)

理科については委員の意見のとおり実験というところは生徒に思考をさせるということも含め、非常に大切なところだと考えている。

例えば砂糖や食塩の粉末を区別する実験が1年生にあるが、東書87ページ、啓林館138ページ、学図53ページにある。

1年生の最初の実験であるが、東書が、左側にガスバーナーの使い方とセットで「ステップ1 実験の計画」、「ステップ2 実験する」、「ステップ3 結果と考察」と、手順が系統立てて、書かれている。これによって生徒は実際の実験結果から考察を導くことができるよう構成されている。

啓林館は、探求実験を設定していて、同様に結果から考察する学習過程の部分が丁寧に示されている。

学図については、一見して何をするのがやや掴みづらいという意見もあった。また実験する前に、結果が明らかになっている発行者もある。

やはり1年生の最初の実験というところから考えると、東書と啓林館、この2者の教科書がわかりやすいのではないかなと考える。

(柴崎委員)

東書と啓林館を比較して、実験を行ううえでの安全面での配慮のなされ方、あるいは教師が子どもたちの安全を確保しながら実験を指導する、ということから見て、どちらが良いか。

(選定副委員長)

委員の意見のとおり、実験は、器具の使い方等様々な点に注意が必要で、その点をしっかり押さえていくことが非常に大切である。そういう注意事項については教科書を選ぶ点においても重要視している。

例えば、東書の目次などを見ると、6ページに「基礎操作」という目次項目がある。それぞれルーペの使い方やスケッチの仕方、ガスバーナーの使い方等がそれぞれのページに書かれている。

啓林館でも、1年生の目次9ページ右に「観察実験の技能」というところがあり、それぞれ細かく、ガスバーナーの使い方や、電子天秤の使い方、それでページをとって丁寧に説明されている。この2者については丁寧に説明されている。各者とも工夫されているが、啓林館、東書については特にわかりやすいと感じる。

(辻委員)

前回採択のときに東書の教科書が少し横に大きくなっているような気がしたが、重くはなっていないか。また、紙質は選定委員会では、話題に挙がっているか。

(選定副委員長)

委員の質問について、選定委員会の方でも話題に挙がった。教科書のサイズ的には、大日本だけが横幅がやや狭くなっていて、他の4者については、すべて同じサイズとなっている。大きい方が良いというわけではないが、全体の配置などを考慮した場合は、東書や啓林館のサイズは、妥当であると考えている。

紙質については、東書と学図が、やや柔らかめで、啓林館は若干硬めだと感じられる。重さで言うと、東書の教科書が軽く感じられると思う。生徒が持ち運ぶことを考えた場合には、大きなポイントとなると考えている。

(事務局)

事務局から1点追加がある。現行の東京書籍の教科書は、縦長になっていて今回の見本本の方は、横に広がって、縦には短いというサイズ感である。

(教育長)

東書、啓林館を中心に実験について等、説明があった。東書と啓林館について同じぐらいと感じるので、判断材料としてそれぞれのセールスポイントがあるなら教えてほしい。

(選定副委員長)

まず、東書は、「生徒がどういうことを身につけなければならないか、その能力は何なのか」ということが、「理科の見方・考え方」などがアイコンで表示されていて、非常にわかりやすい。また單元ごとに関連する本についても紹介をされており、またそれに関するコラムがあるなど、理科を日常生活の身近なできごととつなげて理解できるような工夫がされている。

啓林館は、本市の海洋教育でも取り組んでいる「チリメンモンスター」について1年生の51ページで取り上げている。小学生が、「チリモン探し」としてよく取り組んでいる教材であるが、中学校の教科書にも取扱いがあることで、興味を引くのではないかと思う。また、全体に写真や図が大きく見やすく、数も多いので授業で活用しやすいという意見もあった。巻末にある探Qシー

トは、ノートに貼ることを見越したサイズになっていて、考えやすいように仮説の欄も設けて、思考力を伸ばす工夫がされていると感じる。

(柴崎委員)

探Qシートについて、調査員の反応はどうだったか。

(選定副委員長)

調査員からは、探Qシートの内容や具体的な活用については特に指摘はなかったが、ノートに貼りやすいサイズであるとの話はあったので、実際に授業で使える資料であると考えている。

(教育長)

それでは、理科について採択する。改めて選定委員会から推薦する発行者はどこか。

(選定副委員長)

選定委員会として、最も推薦する発行者は東書で、次に啓林館である。

(教育長)

採択する教科書は、東書でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、理科の教科書は東書とする。

続いて音楽一般について、選定委員会からの報告を求める。

(選定委員)

音楽一般は、教出、教芸の2者について報告する。

教出は、目次が、「歌唱」「鑑賞」「創作」に分かれており、各教材が見通せるようになっていて非常にわかりやすいという特徴がある。また、巻末の折り込みページに資料があり、写真やイラストが豊富であるというのが推薦点である。ただ教科書全体を通して、情報量が若干多く、生徒にとっては、ポイントがわかりづらいのではないかとというような課題も挙がっている。

教芸は、現在中学校で使用している教科書である。各教材の左の端に、縦書きのような形で「考えたいポイント」があり、どういうことに注意をして、この活動をしていくのかということが丁寧に示されており、生徒が主体的に学習するという意味では、非常に工夫されているというのが推薦点である。また、1年生の26ページや32ページ等に「学びのコンパス」というコーナーがあり、楽曲の特徴や構成などが、発展的に学習できる内容になっていることも推薦点である。ただ、巻末あたりにある「音楽の約束」というページでは、もう少し詳しい解説があれば、よりわかりやすいのではないかと課題点が挙がっている。

(辻委員)

国内外の曲、現在の曲や伝統芸能、民俗芸能、コンピューターを使用した音楽など、取り上げられている内容が多岐にわたっているように感じる。その中

で選曲や使いやすさの面で、どのような意見があったか。

(選定委員)

教出については、非常に教材の数が多く、内容も幅広いという意見があった。教芸については、非常にバランスよく構成されていて、必要な範囲を無理なく

取り扱えるようになってきているという評価である。

この両者に掲載されている同じ教材の配列について、調査員から詳しく報告を受けた。

教出の1年生の18ページから21ページ、教芸の2・3年上の教科書の18ページから21ページに『夏の思い出』という教材が取り扱われている。調査員からは、情景や作者の思いを想像しながら、その曲を学ぶのは1年生では難しく感じるというような意見が出た。そういう意味では教芸では、同じ教材を2年生で扱っており、より情景や作者の思いを理解しやすいのではないかと感じる。また、『早春賦』という曲も非常に難しい曲だが、教出は2・3年上で扱っており、教芸は2・3年下で扱っている。以上のように同じ教材を、教芸の方は、1学年上で扱うような構成になっていることより、その曲を深く理解するという意味では、教芸の方が配列としてはよいのではないかという意見が出た。

(辻委員)

教出の2・3年上の56ページ、57ページと、教芸の2・3年下の48～50ページに、伝統芸能の能のことが取り上げられている。教芸の方が、書き方としては本格的かと感じた。伝統芸能をそのまま載せてしまうと、子どもたちが理解しがたいところもあると思うが、子どもにとってのわかりやすさを含めた取扱いについてはどうか。

(選定委員)

本格的なものに近いものを理解させようという意図からしても、教芸の方は1年遅らせてでも、本物に近い表記を使っているというところでも、こだわりがあると感じる。ただ、伝統芸能や日本古来の音楽については両者とも、各学年でバランスよく取り扱っているという点では大きな差はない。例えば「六段の調べ」や「越天楽」は、ともに掲載されており、和楽器や郷土のお祭り等も多く紹介されているという印象である。体験や響きを味わう活動も示されていて、生徒が伝統芸能に親しめる工夫は、両者とも十分にされていると感じる。また、日本以外のアジアの国々や世界の伝統音楽も両者ともしっかりと取り上げていて、諸外国の音楽文化を理解できるように配置されている点でも、両者とも大きな差はないと感じる。

(柴崎委員)

選定委員会として、どちらの教科書を推薦するのか。

(選定委員)

選定委員会としては、第一に教芸を推薦する。音楽一般の調査研究にあつ

ては、子どもの発達に応じて、生徒が主体的に取り組める教材であるかを大きなポイントにした。

教出は、教材が非常に豊富で、生徒に多くの楽曲を学んで欲しいという観点であれば望ましいが、楽曲が多くなるということは、それだけ活動内容も多くなり、1曲あたりの時間が短くなってしまう。また、先述のとおり楽曲自体も難しく、学年の配列が早くなっているということがありますので、阪南市の子どもたちに、ただ単に音楽をこなしていくのではなくて、音楽をしっかり理解して活動していくというような発達段階に応じた、主体的な活動を考えれば、教芸の楽曲の配列の方が合っているのではないかと考え、教芸を一番に推す。

(教育長職務代理者)

今使っている教科書も教芸であるが、良くなっているところはあるか。

(選定委員)

合唱曲や鑑賞曲では、作詞・作曲者の横に、音楽的な見方・考え方を働かせるための「考えたいポイント」が必ず示されていて、生徒が主体的に考えて取り組んでいく手だてとなっていて、とても良くなったと感じる。授業をする教員の立場からも、非常に指導しやすくなったという意見も聞いている。そこも推薦のポイントである。

(教育長)

それでは、音楽一般について採択する。改めて選定委員会から推薦する発行者はどこか。

(選定委員)

選定委員会として、最も推薦する発行者は教芸で、次に教出である。

(教育長)

採択する教科書は、教芸でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、音楽一般の教科書は教芸とする。

続いて音楽器楽について、選定委員会からの報告を求める。

(選定委員長)

音楽器楽は教出、教芸の2者について報告する。

教出は、目次が「吹く楽器」「弦楽器」「打楽器」の順番に載っており、わかりやすく見やすい。また、31ページや56ページ等、諸外国の楽器を紹介するページがあるのが良いなどの推薦点がある。ただ、打楽器を紹介するページが少なく、ひとまとめにされているという課題点もある。

教芸は、現在中学校で使用している教科書である。楽器の図鑑や、63ページの打楽器の奏法などがたくさん盛り込まれており、視覚的に学習しやすいように工夫されている。60ページや108ページなど各楽器には「楽器を知る

う」のコーナーがあり、詳しく説明されているなどの推薦点がある。ただ、リコーダーの練習曲が変わっておらず、工夫が欲しいとの課題点もあった。

(辻委員)

日本の伝統的な楽器の演奏方法等の解説について2ページを割いて扱うなど、充実してきたように感じる。教芸の59ページに伝統芸能における楽器がどのジャンルで使われているとか、楽器編成についても書かれていて非常に良いと思う。

二次元コード等で、どんな音がするのかを見せて聞かせる場面も増えてきていると思うが、そのような点も含めて両者の評価はどうか。

(選定委員長)

委員の意見の通り、伝統芸能に用いる楽器がわかりやすく紹介されているのが良いということは、選定委員会の中でも出ていた。

そこでは、両者とも「篠笛」「尺八」「箏」「三味線」「太鼓」の5種類が取り上げられており、名称や演奏方法、構え方などが詳しく説明されている。デジタルコンテンツについては、それぞれの楽器の演奏法などが動画で説明されていて両者とも授業で用いることができ、わかりやすいという評価である。

両者を比較すると、教出はそれぞれの楽器の最後に「深めてみよう」というコーナーがあって、発展的な内容が取り上げているのが特徴である。

教芸は「箏」とか「太鼓」についての練習曲がたくさんあり、充実している。

(辻委員)

器楽で取り扱う楽器と言えば、リコーダーが中心かと思うが、ギター等のリコーダー以外の楽器の取扱いはどうか。

(選定委員長)

委員の意見のとおり、取扱いも含めてリコーダーが中心であり、特に中学校から新しく扱うアルトリコーダーが中心になっている。各校において、楽器などの数の状況により、ギターを扱う機会っていうのはあまりないと聞いている。

和楽器だと「箏」を扱うことはあるが、他はなかなかない。実際に扱うことができる楽器が限られているので、教科書では、楽器に関する説明が丁寧されている方がよいと考えている。

(水島委員)

アルトリコーダーに絞って言うと、両者の教科書の評価はどうか。

(選定委員長)

教出は、アルトリコーダーとソプラノリコーダーの運指が両方並んで載せられており、生徒が、どちらかわかりづらいと感じる。また10ページ、11ページに、息継ぎのタイミングを示す「ブレス記号」が、教出と教芸では表記が違っている。教出は「(カンマ)」、教芸は「v」が使われている。教芸の記号の方が一般的でわかりやすいという意見も出ていた。

(教育長職務代理者)

音楽一般と音楽器楽で違う発行者でも特に問題はないか。

(選定委員長)

そこについては特に問題ないと聞いている。

(教育長)

最終的に選定委員会としてどちらを推薦するのか。またその理由について再度まとめた形で説明を求める。

(選定委員長)

選定委員会としては第一に、教芸を推薦する。

器楽に関しても、生徒の発達に応じて主体的に取り組める教科書という観点で、調査研究及び検討を行った。両者とも写真やイラスト、動画等を用いて楽器の演奏方法などがわかりやすく示されていたが、教芸の教科書には、楽器の図鑑や打楽器の奏法楽器の由来などの情報がたくさん盛り込まれており、音楽に親しみ、豊かな情操を養うことにつながると考える。また、本市で扱うことが多い楽器について内容が充実しており、アルトリコーダーに関してもわかりやすく掲載されている点も、教芸を推薦する理由の1つである。

(教育長)

それでは、音楽器楽について採択する。選定委員会としては一番に推薦するのは教芸、続いて教出ということだが、採択する教科書は、教芸でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、音楽器楽の教科書は教芸とする。

続いて美術について、選定委員会からの報告を求める。

(選定副委員長)

美術は、開隆堂、光村、日文について報告する。

開隆堂は、映画監督の新海誠さんのインタビューや、岡本太郎さんの「太陽の塔」が掲載されており、生徒が美術をより身近に感じられる工夫がされている。また、生徒の考えた内容が掲載されていてよいという点が推薦点として挙げられている。ただ、ポスター制作などでよく扱う「レタリング」についての内容が少ないという課題点も挙げられている。

光村は現在中学校で使用している教科書である。2・3年生の教科書の27ページに日本の絵画がわかりやすく解説されている点がよいという意見があった。また、教科書に掲載されている資料が本物に近い色で掲載されているという推薦点もある。ただ、1年生には別冊資料があるが、2・3年生の教科書にはついていなくて、デジタルコンテンツになっている。それならば、1年生も別冊でなく、デジタルでもよかったのではないかという課題も挙げられていた。

日文は、例えば1年生366ページに日常生活とつなげる内容があり、家庭

科などと教科横断的に取り組める教材がある。また、資料が厳選されており、余白が多く見やすい構成であるという推薦点もある。ただ、その分資料が全体的に少なく感じるという課題点としては挙げられていた。

(水島委員)

特に印象的だったのが、開隆堂の表紙の表面を触った時に凹凸があることである。この点の評価はどうか。

(選定副委員長)

委員の意見に合った開隆堂の表紙についても選定委員会の中でも議題になった。

1年生の表紙は、「ドラゴンの噴水」というものであるが、タイルのような質感になっている。2・3年生の表紙は、ゴッホの「ひまわり」である。本当に油絵を触っているかのような質感になっている。実際に美術の授業をする調査員のからも、「生徒たちが実際にこの表紙にさわること、特にこの油絵の方は、厚塗りしていることが感覚でわかる。この感覚を美術教員としては、大切にしたい」という思いも聞いている。開隆堂の教科書の表紙については非常に良い評価であった。

(教育長)

美術の時間は絵画等の制作の時間に授業の多くを費やすと思うが、その際教科書をどのように活用しているのか。教科書を実際の製作に活用していくという観点で考えたときに、それぞれの教科書の写真や挿絵等の量や配置はどう考えるか。

(選定副委員長)

教育長の意見のとおり、美術については、制作に多くの時間を使う。美術は制作等、実習を大事にしている教科書であるので、教科書は補助的な役割として導入等で活用することが多い。ただ、教科書の使用を増やしたいという思いがあり、生徒の発想力や思考力を高めるような工夫やアイデアが盛り込まれた教科書を重要視している。その観点で見ると、写真や作品などの資料が豊富であり、「作者の言葉」などの作品の説明も書かれている開隆堂がよいと考えている。

1年生の14ページに「その人らしさが大切」という自画像を扱った教材がある。美術においては、鑑賞して、技能を身につけて、発想していくという流れがあるが、その見通しをつけやすいように工夫されている。また、豊富な資料があることから、自分はどういうものを取り入れてみようかと導入部分で考えやすい。そういう点で、開隆堂が優れているという意見もあった。

(教育長職務代理者)

今、開隆堂について説明があったが、選定委員会が推薦する順位とその理由を教えてほしい。

(選定副委員長)

選定委員会としては、開隆堂、光村、日文の順で推薦する。それぞれの差に

については、開隆堂と光村にはほとんど差はなく、日文との間には差があると考えている。

3者それぞれによさがあり、3者のよいところを合わせると、すばらしい教科書ができるという調査員の意見もあった。この中で順位をつけるには選定委員会でも議論が非常に白熱した。その中でも開隆堂の資料の豊富さに対する評価が非常に高かった。現在は美術においては資料集を購入して使っている。開隆堂の教科書で使うのであれば、その資料集の購入も必要がないのではないかとというぐらい充実しているという意見もあった。

光村については、現在使用している教科書でもあり、使いやすく、写真や絵の印刷が非常に素晴らしい。先述の日本美術のコーナーも良いとの評価であった。一方で2・3年生の教科書の12ページに『最後の晚餐』が掲載されていて、現在使用している光村の教科書では、一点透視図法を理解しやすくするためのトレーシングペーパーがついていてよかったが、今回はなくなっている点は、少し残念な変更であると調査員からの意見もあった。

日文についても、写真も非常に綺麗で、そこについては良い評価であった。ただ先述のとおり、資料が若干少なく感じることや、教科書が3冊に分かれていて使いづらいという意見があった。

(教育長)

制作活動をする場合に自由な発想が大切と考える。開隆堂については資料が豊富で資料集も必要ないという説明であったが、資料が多すぎることで、子どもの発想の幅を狭めてしまったり、方向性を決めてしまったりすることにはならないか。

(選定副委員長)

選定委員会の中でも同様の議論があった。

調査員からは、実際に事業をしている中で、今の子どもたちは、すぐに正解を求める傾向を強く感じる。絵手紙の活動において、子どもたちに発想しながら絵手紙を書かせたいという中で、子どもたちはタブレットで「夏 絵手紙」と検索をして答えを求めることがあったという話も聞いている。自由に発想できるということは素晴らしいが、誰もができることではなくて、発想に至るきっかけが必要ではないかということが、調査員の中では議論になったということであった。

開隆堂2・3年生の69ページ、光村2・3年生の71ページに『VICTORY』という作品が掲載されている。光村は、作者名、作品名のみが載っている。開隆堂は、構図や作品に込めたメッセージが2行で示されている。作品の解説はされているが、子どもの自由な発想を妨げるほど、事細かに作品の説明が書いてあるというわけではなくて、黄色と黒のみで表現しているという特徴ではなく、特殊な構図についてのみ触れている。子どもたちが作品を見たうえで、何か1つきっかけを与えて、子どもたちが何か考えやすいようにとか、もう少し違う視点で作品を見てはどうか、と教員が投げかける等、他の大切な部分に気

づかせることができるような授業展開が想定されやすいと考える。この点について、長い議論を経て、開隆堂を上位に推薦するに至った。

(教育長)

光村の日本美術のコーナーについて非常に良いと感じる。これよりも、やはり開隆堂が良いというアピールポイントについて教えてほしい。

(選定副委員長)

先ほどもお伝えしたが、この3者の教科書を合わせたら本当に一番いいものができるという意見が調査員からあった。光村の調査員が推しているポイントも教育長から話があった日本美術のところは良い評価であったが、開隆堂については、やはり資料の豊富さや色使い、表紙の凹凸等については特に良い評価であった。

実際に授業を行う際、特に導入で子どもたちに考えさせるきっかけを与えるという点で見たときには、やはり開隆堂が一番使いやすいという意見もあり、開隆堂を上位とした。

(柴崎委員)

光村2・3年生74ページを見ていたときに、「映像の表現」というものがあったが、実際授業でこのような内容を扱うのか。また、学習指導要領にも示されているか。

(選定副委員長)

開隆堂72ページ、73ページにでも「映像メディア」についての取扱いがある。この両者とも取り扱っているので、取り入れる材料となっているかと思う。

子どもたちはタブレットも持っているので、タブレット等を使いながら美術として取り入れることができると思う。

(選定委員長)

実際に学校現場では、子どもたちはタブレットを使って、自分たちが撮影したものを編集するなどの授業は行っている。

(水島委員)

原寸大の資料は、とても説得力があると思う。そういうものをたくさん取り入れていただけたら、教科書として子どもたちにとって魅力のあるものになると思う。

(選定副委員長)

この3者については課題というより、それぞれの発行者のよさについて調査員がアピールしており、この教科書にはこのよさがあり、甲乙つけがたいというところがあった。ただ1者を選ぶという中で、より課題が少ないという開隆堂を推薦することとなった。

(教育長)

それでは、美術について採択する。説明にもあったように、本市としては採択する教科書は開隆堂でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、美術の教科書は開隆堂とする。

続いて保健体育について、選定委員会からの報告を求める。

(選定委員)

保健体育は、東書、大日本、大修館、学研の4者について報告する。

まず、東書は24ページにアレルギーについてまとめた章末資料が非常にわかりやすく、また、1ページに本文と資料がある場合、点線で区切られていて、どこからどこまでが本文で、どこが資料であるというようなことも、非常にわかりやすく、レイアウトされているのもいいという推薦点がある。ただ、写真の資料が少なく感じるという課題点もあった。

大日本は62ページから中学校で学ぶ運動や技術、学び方がまとめられているのが非常によく、また、心肺蘇生法なども見開きで大きく示されているのが良いという推薦点がある。ただ、SDGsやLGBTQ+等に関する記載がないことが課題点である。

大修館は、各章の最後に「章のまとめ」があり、観点別に振り返ることができ、学習が進めやすく、また、96ページには、「スマホの習慣」についての特集ページが含まれており、依存度チェックができることが現代にマッチしているという推薦点が挙げられている。ただ、自然災害についての内容はやや物足りないという課題点もあった。

学研は、現在中学校で使用している教科書である。ウォームアップ、本文、エクササイズという、学習の流れがはっきりしていて、非常にわかりやすく、シンプルで要点を絞って学習することができるようになっているというのが推薦点である。ただ、シンプルであるがために、余白が多くあるように見えるというのが課題点である。

(水島委員)

中学生ともなると、性のことや感染症等に非常に興味が出てくる。そのようなところに着目をした。この点で、3者の違いはどのようなところか。

(選定委員)

中学校の保健体育においては、学習指導要領に示された内容に基づいて指導していくわけであるが、例えば、「生殖機能の成熟」に関する学習では、射精や月経、受精や妊娠について取り扱うということとなっている。

東書32ページから、大日本34ページから、大修館36ページから、学研48ページから、それぞれ見開き2ページ分にわたって取り扱っている。

各者とも必要な言葉や事項についてはすべて網羅されているが、イラストや写真のサイズや使い方には若干の差がある。また、生徒が不安を感じるような事柄について、東書、学研、大修館の3者については、Q&Aの形で取り上げて

いて、配慮が感じられる。

排卵、受精、着床については、学研と大修館のイラストが大きくてわかりやすいと感じる。また、東書、学研、大修館は、2次元コードから資料につながるようになっていて、資料が豊富だと感じる。

性感染症について、特にその種類や感染経路については、その予防について取り扱うことになっている。東書は146ページ、大日本は136ページ、大修館は146ページ、学研は156ページにそれぞれ掲載されている。性感染症について、各者とも予防方法など必要な学習事項については、きちんと取り上げられている。大日本は、近年急増している梅毒に関する資料がやや古いと感じる部分がある。学研は、グラフから読み取るようになっていて、扱いはさほど大きくない。東書、大修館はコラム的に取り上げており、より注意を喚起する扱いとなっているように感じる。また、東書と学研と大修館は2次元コードから資料につながっていくというような形をとっている。

委員の指摘の2つの学習内容の取扱いに関しては、学研と大修館が、内容や資料が充実していて、わかりやすいと感じる。続いて東書が資料的には豊富であり、大日本は、資料や情報は古いということで、やや評価が下がっている。  
(辻委員)

前回の採択でもポイントであった「性の多様性」について、前回から今回にかけてさらに社会で話題になり、取り上げられる機会が増えてきていると思う。この点について各者の内容の取扱いはどうか。

(選定委員)

「性の多様性」について学ぶのは保健体育だけではなく、人権学習やその他の教科と横断的に学んでいくということで非常に重要なテーマである。その点で調査員も注目して調査を行っている。

東書は51ページに「性の多様性」について発展的な内容として取り上げて、性の構成要素等について触れている。

大日本は、38ページにジェンダーに関する記載があるが、LGBTQ+や性的マイノリティに関わる記載がない。この点は残念である。

学研は66ページに、探求的な学習のテーマとして触れられている。

大修館は、42ページと43ページを見開き1ページで、性に関する固定的な考え方や心の性に触れるだけではなく、不安や悩みなど、コラムを掲載しており、非常に充実している内容になっている。

4者を比較すると、「性の多様性」については、大修館が最も充実している。東書、学研は一部で取り扱っているが、大日本には記載がないという調査結果となっている。

(柴崎委員)

性的マイノリティの説明で、各者に少し差があるように感じたが、選定委員会として、この4社の推薦順はどうか。

(選定委員)

今社会的問題になっているオーバードーズや大麻、以前からの喫煙や飲酒といったところの記載についてどうかということで、かなり議論になった。

その点については、東書は96ページから、大日本は76ページから、大修館は88ページから、学研は92ページから、それぞれ喫煙や飲酒、薬物の乱用について掲載されている。どの発行者も、大麻を含め薬物の危険性などについては記載されているが、各者を見比べたときに、大修館の教科書が、資料や写真を効果的に使い、生徒にとって大切なことが非常にわかりやすく、学びやすい形で表記されているということで、調査員からは非常に高い評価であった。またオーバードーズに関しては、医薬品の正しい使い方を学ぶところで、薬局やコンビニで購入できるが、決められた使用方法に従って使うことについて、各者とも、きちんと記載されている。子どもたちへの注意喚起につなげるという意味では、非常に大切なポイントだと考えている。

(柴崎委員)

今の内容からすると推測すると、大修館を一位に推すとうことでよいか。

(選定委員)

トータルして一番バランスが取れているのが大修館だと考えている。次に学研、そして少し差があって東書、大日本という順である。

(柴崎委員)

学研は今現在使っている教科書であるが、その教科書よりも、大修館の方が良いと選定委員会では考えているということか。その理由を説明してほしい。

(選定委員)

学研は、ウォームアップ、本文、エクササイズという学習の流れがはっきりしていて非常にわかりやすく、現在使っていても非常に使いやすくと、調査員から報告を受けている。ただ、ウォームアップの位置が、現行と少し変更されていて、ページが見つらなくなったのが残念だという評価を調査員から出ている。

掲載されている資料はよいもので、大修館とほとんど差はないが、子どもたちが見やすくてわかりやすい教科書という観点でいうと、今回の大修館の方が評価が高かった。また「性の多様性」などの大切さを考えるきっかけや、依存度チェックリストなども、子どもたちの生活に近く、現代的な内容が充実しているということで、大修館の教科書が高い評価となっている。

(水島委員)

大麻や覚せい剤より、オーバードーズのせき止め等がメインになっているという話なので、今後の教科書には、そのような内容が詳しく入ってくることを期待している。子どもの頃から広めてもらいたいと思う。

(選定委員)

学校現場には、校長会や教頭会を通じて、オーバードーズの件については、しっかりと伝えなければならない問題だと考えている。現場でも最近意識が高まっていて、手軽に手に入るだけに処方仕方の仕方等について、学校生活、学習の

活動のすべてを通して触れていながら、指導していかないといけないということで、現場の意識は高まっている。

(教育長)

それでは、保健体育について採択する。採択する教科書は大修館でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、保健体育の教科書は大修館とする。

続いて技術について、選定委員会からの報告を求める。

(選定委員長)

技術は、東書、教図、開隆堂の3者について、報告する。

東書は現在中学校で使用している教科書である。エネルギー変換のところは非常にわかりやすく、全体を通して、問題解決の流れを意識して構成されている。

情報量はやや多いと感じるが、生徒が教科書を見たときに、一目で理解できるようなイメージがある。ただ、第4章の情報分野のイラストがわかりにくいという意見があり、実物の写真を掲載した方がわかりやすいという意見もあった。例えば202ページにロボット掃除機の絵があるが、実物の写真の方が良いという意見があった。

教図は、技術別冊のスキルアシストがついている。使い方によってはとても便利だと思うが、技術では、教科書自体をハンドノートの使用することが多いため、教科書と別にスキルアシストがあることは、その保管も含め、かえって扱いづらいのではないかという意見があった。現状、別冊は必要ないと考えている。

開隆堂は、8ページから17ページにガイダンスがいろいろなパターンで書かれていることや、工夫の話が多く、生徒にとってわかりやすいと感じた。写真も1つずつ添付されているので、説明もしやすく、理解もしやすいと思う。また、のこぎりについては、以前の教科書と比べてもページ数が減少しており、34ページから35ページに書かれているが、必要な情報量が記載されている。

ただ、行間がやや狭くなっているという課題もあった。

また3者とも2次元コードが充実しているので、情報量については十分に確保されているという意見があった。

(柴崎委員)

3者の内容等を比べて、選定委員会としての推薦順位はどうか。

(選定委員長)

東書と開隆堂にはほとんど差はない。ただ、教図はこの2者に比べて使いづらいという意見があった。上位2者の差は情報分野の取扱いについての差といえる。東書は現行の教科書なので、見慣れているため、そのよさを感じやすい

と言える。特に紙の材質がやわらかくて生徒にとっては使いやすく感じるという意見があった。

開隆堂は紙質がやや硬くて重く感じる。ただ、生徒にとって使いやすさやわかりやすさ、また活動に生かせるものということを考えると、優れていると感じる。

(辻委員)

2次元コードがたくさん載っていて、木工とか加工する作業を動画等で確認できるのは良い。教図の「スキルアシスト」についての見解も理解できた。教科書の構成を見ると、例えばエネルギー変換の技術から情報の技術という流れが続いているが、子どもたちが主体性を持って、諸問題の解決や未来に向けて「自分たちがどうしないといけないか」を考えられるようなプロセスの観点で、優れた教科書はあるか。

(選定委員長)

まず、東書は、全体的に問題解決の流れやプロセスが、しっかりと構成に生かされた教科書だと言える。ただ、東書142ページと開隆堂164ページには、火力発電について書かれている。東書は情報量がやや多く、その点で、必要十分なものだけを記載している開隆堂に比べて、やや使いづらいという意見もあった。

ただ、3年間通して使用することを考えた場合には決して情報量が多すぎることではないという意見もあった。

開隆堂の164ページにある発電方法の種類と特徴が、火力発電や原子力発電、水力発電について、写真と絵をうまく組み合わせて1ページにまとめられていて、見やすくなっている。東書も開隆堂もすべてのページのレイアウトが整理されており、どこに何があるのか、生徒にとっては探しやすいと思う。作業時のハンドブックとして活用するという点も良いポイントだと考えている。

(辻委員)

1位、2位の差について、現行と比べて大きな変化等を含めて教えてほしい。

(選定委員長)

東書は現行と大きな差はないと言える。学校現場では使いやすい教科書だと思う。対して開隆堂は、大きく改良されたと感じる。技術の授業中、生徒は文字を読むというより、写真などを見ながら活動したり作業をしたりすることが多いので、そうした観点で好ましい編集になったと感じている。

(教育長)

東書と開隆堂が良いということだが、この2者に絞って、決め手になるポイントがあれば教えてほしい。

(選定委員長)

実際に選定委員会でも、意見が割れた。調査員からの聞き取りと推薦では、開隆堂に傾いたが、複数の選定委員から、東書を推してはどうかという意見が

出た。その根拠としては、情報量の豊富さと、常に問題解決を意識した構成になっているという点である。内容的にどちらもすぐれた教科書であることから、阪南市の生徒につけたい力という観点で、東書を1位とすることが良いという結論に達した。

(教育長)

本市の生徒につけたい力という観点で、東書が良いという点について、もう少し詳細の説明を求める。

(選定委員長)

特に59ページの図の3のところ、「問題の発見」から「課題の設定」までの手立ての例がより具体的にわかりやすく示されていて、「自分で課題を見つけて解決していく力をつけさせていきたい」というところで東書の教科書が扱いやすいのではないかとこのように考えている。

(教育長)

それでは、技術について採択する。説明にもあったように、選定委員会として一番に推薦するのは、東書でよいか。

(選定委員長)

そのとおりである。

(教育長)

採択する教科書は東書でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、技術の教科書は東書とする。

続いて家庭について、選定委員会からの報告を求める。

(選定副委員長)

家庭は東書、教図、開隆堂の3者について報告する。

東書は、学習内容がきちんと網羅をされていて、様々な職業の方が取り上げられている点では、教図と同様に充実をしていると思う。また教科書断面が色分けされており、使いやすくなっているというような特徴がある。

教図は現在中学校で使用している教科書である。紙面全体が文字も写真も非常に鮮明で見やすくなっている。重要な語句については、青字になっていて生徒にとってもわかりやすくなっている。また、様々な職業の方がキャリア教育として取り上げられており、目次にも記載があり、わかりやすく、生徒の興味・関心を引く工夫がされている。

開隆堂は、情報量が多いというのが特徴である。ただ、表紙をはじめ各紙面の色使いが見づらいように感じる。特に178ページから181ページの食品成分表は、生徒にとっては内容の把握がしづらいつと感じた。

(辻委員)

3者それぞれの特徴はよくわかったが、この3者の差についてはどうか。

(選定副委員長)

選定委員会としては、まず1位は教図で、突出して良いと感じている。特に食についてもシュウマイの調理実習の内容などが改訂されていて、生徒が興味・関心を持つようにさらに工夫されている。

2位は、東書である。以前、本市においても使用していた時期もあった。今回の改訂でも良くなっているとは感じるが、調理の写真など、生徒がパッと見たときに、興味・関心を持つ工夫では、やや物足りないように感じる。その点についても教図とは差があると感じる。

3位の開隆堂については、先述のとおり情報過多になっている部分があり、生徒にとっては読みづらく、家庭科の作業や活動の中では少し扱いにくいと感じる。

(水島委員)

取り上げている情報で何か新しいところや、ここが一番という点についてももう少し詳しく教えてほしい。

(選定副委員長)

SDGsと関連してよく使われている言葉として、「エシカル消費」という言葉も最近よく聞くことがある。教図は、252ページに取り上げられている。エシカル消費の用語の説明に加え、写真も下に載せられていて、非常にわかりやすく説明をされている。

東書についても215ページに記載があるが、写真が小さく、エシカル消費とは何かということが、教図に比べては、わかりにくいように思う。

開隆堂は、307ページに、関連する教材はあるが、「エシカル消費」という用語については、取扱いがない。「エシカル消費」1つとってみても教図の方が充実をしていると思う。

さらに教図の良いポイントとしては、92ページから93ページに、「1日分の献立を考えてみよう」というところがあり、ここには食品群別摂取量の目安が載っており、朝食夕食の合計がすでに記入されているなど、計算が苦手な生徒にとっても配慮された記載となっている。

(教育長職務代理者)

教図のわかりやすさはすごく理解するが、56ページのお風呂の写真が、どうしても気になる。男性の胸もプライベートパーツだと教えている中、堂々と教科書に載るというのが、どうしても引かかる。これについての議論はあったか。

(選定副委員長)

家族の写真は選定委員会の中でも議題に挙がった。委員ご指摘の教図56ページに入浴の写真が、50ページ、51ページには様々な年齢の子どもの写真が掲載されている。東書250ページ、251ページにそれぞれ様々な年齢の子どもの写真が載っている。これらの写真についてはリアルな写真も多く、生徒の興味・関心を引くということもあるが、もしかしたらこの好ましくない扱

いをする生徒がいるのではないかというところは議論になった。実際に議論をする中で、現行でも同様の写真は掲載をされている。実際現行の教科書を使って授業をする中で、不都合な点があったかというところについて調査員に尋ねたが、特に現状、懸念されるというようなことは起きてないと確認している。ただ、委員の指摘のとおり、この男性のプライベートゾーンのことについては、家庭の授業だけではなく、子どもたちがしっかりと理解をするよう指導していかなければならないと考えている。

(教育長職務代理者)

家族というところを題材にしたところで、開隆堂は26ページに様々な家族を載せていて、教図は14ページ、東書は21ページ。「家族とは」というだけで、これだけ全部違っている。例えば、開隆堂だと「児童養護施設」や「里親」や「ひとり親」など様々な家族のあり方が載っている。また教図は性的マイノリティのようなものを載せている。教科書によって、家族をどのように見せたいのかが分かれると思うが、これについては何か議論があったのか。

(選定副委員長)

今の指摘については、選定委員会の中では実際具体的な議論はなかった。ただ、家族のあり方や性的マイノリティ、LGBTQ+に関する内容については、家庭科のみで扱うものではなく、人権教育、保健体育との関連、または道徳、そういう教育全体を通して学び考えるべき内容と考えている。今の委員からの意見については、今後、様々な指導助言の場等で、学校現場に伝えながら指導に努めたいと考えている。

(教育長)

それでは、家庭について採択する。改めて選定委員会から推薦する発行者はどこか。

(選定委員長)

選定委員会として、最も推薦する発行者は教図で、次に東書である。

(教育長)

採択する教科書は、教図でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、家庭の教科書は教図とする。

続いて外国語について選定委員会からの報告を求める。

(選定委員)

外国語は、東書、開隆堂、三省堂、教出、光村、啓林館の6者について報告する。

東書は現在中学校で使用している教科書である。1年生の文法の順番が今回変更されており、非常に使いやすくなったという報告を受けている。新しく出てくる単語、New Wordsと一緒に小学校の単語も記載されるように改良されてい

るところも非常に良い点であると感じる。様々な時事問題も取り扱っている  
ので、幅広く学習できるという意見も出ている。

開隆堂は、3年間を通して、各プログラムの最初にScenesというページがあ  
って、左側が基本本文の漫画になっていて、その単元で学習する内容がわかりや  
すく説明されているのが良い点だという報告を受けている。右側のページが、  
基本本文に関する簡単なListeningや、会話などのActivityになっていて、生徒に  
とってはしっかり学習したうえで、Activityに取り組める流れになっているの  
が、推薦点である。

三省堂は、Lessonの学習が授業の流れに沿っているというのが良い点であ  
る。具体的には、「各パート、基本の文法事項の確認、そのためのExerciseと  
いうセットがまずあって、続いて、本文があり、最終的にそれを使った  
Activityや長文読解がある」という流れで、統一されている。そのため生徒に  
とっては、非常に理解しやすいというのが推薦点である。

教出は、1年生のLesson1・2が漫画形式になっていて、生徒にとってはイ  
メージを身近に感じながら、理解しやすい内容になっているというのが推薦点  
である。また、ページの下や横に、Tool Kitというコーナーがついていて、生  
徒が基本の文章を理解するためのパターンプラクティスができ、基礎基本を定  
着するためのツールとして非常に有効と言える。

光村は、本文の隣にあるActivityが、Listening、Speaking、Writingの順に  
統一されていて、3年間を通して使いやすいというのが推薦点である。また、3  
年間を通して、中学校生活を中心としたストーリーで構成されているのも、親  
近感が湧く工夫である。また、巻末のLet's Talkは、各会話で使える相槌が常  
に見えるように紙面が若干短くなっている点も、良いと言える。

啓林館は、例えば2年生60ページ、61ページにLet's talkという例文が  
あり、ロールプレイに取り組みやすい工夫がされている。巻末資料のWord Boxも  
まとまっていて、作文などに使いやすいというふうな意見が出ていた。

最後に、各者の学習者用のデジタル教科書については、各者ともに一部閲覧で  
きるような形になっていた。使える機能や授業での使いやすさの点では現行の  
ものと大きな変更点がなく、各者とも差はないという報告を受けている。

(柴崎委員)

6者の差について、その理由もあわせて教えてほしい。

(選定委員)

1位は東書で、2位は三省堂である。その他の4者とは少し差があると言え  
る。特に2位と3位の間かなりの差があるので、3位以下の教科書になると、  
使いづらくて困るというような調査報告を受けている。また、1位の東書と2  
位の三省堂の間にも若干の差があるというのが調査員からの報告である。

(柴崎委員)

東書と三省堂との間でも少し差があるとのことだが、阪南市の子どもたちに  
「外国語でこういう力をつけられる」という観点から、もう少し詳しく説明し

てほしい。

(選定委員)

東書は教科書の内容としてはやや難しいが、これぐらいの実力をつけておかないと困るのではないか。そういう点では、非常にまとまった秀逸な教科書であるという報告を受けている。幅広いジャンルを取り扱っているので、いろんなところに興味・関心を引きつける工夫がされている。また、一番のポイントになるところだが、読解力をつけるという意味で、文章量や読解用の問題が、豊富に設定されていて、すべてを訳すというのではなく、流れを見てこういうことが書かれているということを理解する力を今後つけさせたいという観点で言うと、最も適している教科書だと言える。これは、例えば高校入試や全国学力・学習状況調査などでも、分量のあるもので、1個1個を細かく訳していくというのではなく「流れの中でざっくりと書かれている内容まず掴む」という力が、今の阪南市の子どもたちには、大事だと考える。そういう観点で見ると、東書の教科書が非常に良い。

例えば、1年生の77ページは、最初は会話文が多く、すぐに日本語では理解しがたいところがあるが、「何となくこんなことを話しているのかな」とか「何となくこういうことが書いてあるのかな」ということを、英語を英語で理解する力をつけていくときに、やはり東書の教科書が一番有効であると考えてるので、東書と三省堂の間にも差があると報告を受けている。

(教育長)

1位の東書と2位の三省堂と課題があれば教えてほしい。

(選定委員)

まず東書は、教科書のサイズが大きく、良くも悪くも読み物の量が多い。特に2年生の長文の量が非常に多くなっている。だから使い方によっては、長所にも短所にもなるということで、課題点として挙げられている。

三省堂は、東書と比べて、文法事項のバランスや配列が少し扱いづらいと調査員からの報告を受けている。特に、canとshe/heを同時に学習するのは、生徒にとって難しいという意見があった。また疑問詞が複数のLessonに分散しているのも扱いにくい。内容面でも、世界の国や文化について学べる題材が若干少ないことが、三省堂の課題であると報告を受けている。

(水島委員)

小学校からも英語が入っているが、中学1年生でつまづいてしまった場合、英語に苦手意識をもつと思うが、その点で優れている教科書はどれか。

(選定委員)

小学校英語では、基本的には英会話で親しむということがメインになっている。中学校ではそこに具体的な文法事項が入ってきて学習していくという形になるが、小学校の英語でも、先ほどあったcanとshe/heは、同時に扱っているが、実際に文法として学習するときには、生徒は混乱することが多いということで、指導者として教えやすく、生徒も段階を経て学習しやすいという、そう

いう観点で見ると、今回の東書の順番の入れ替えは、非常によい点だと聞いている。

(水島委員)

1年生の文法の順番を入れ替えたということで、どのようにわかりやすくなったのか。

(選定委員)

従来どおりにbe動詞、一般動詞があって、疑問詞があるという学習順の流れは変化ないが、ただ、今現在の教科書では、いきなり、she/heが出てきて、一旦そこで終わって、また後に三単現のsが出てくるときに、再度she/heが出てくるというようなそういう展開になっている。新しい東書の教科書では、she/heが出てきたときに一緒に三単現のsについても学習するような並びに改良されている。

三単現という生徒が非常につまづきやすいところなので、she/heと同時に三単現のsを学ぶという形に、配列が変わったということは、子どもたちにとってはわかりやすい配列になったということである。

また、疑問詞についても、生徒が非常につまづきやすいところであり、現行はやはりどこの発行者もバラバラに出てくるが、新しい東書の教科書では、その疑問詞が一括りになって出てくるような流れになっている。これも理解しやすいと思う。他者にはこのまとまりがないので、配列としたら、東書が1年生にとって、特にわかりやすい形になっていると報告を受けた。

(教育長)

それでは、外国語について採択する。改めて選定委員会から推薦する発行者はどこか。

(選定委員)

選定委員会として、最も推薦する発行者は東書で、次に三省堂である。

(教育長)

採択する教科書は、東書でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、外国語の教科書は東書とする。

続いて道徳について選定委員会からの報告を求める。

(選定委員長)

道徳は、東書、教出、光村、日文、学研、あか図、日科の7者について報告する。

東書は、漫画や挿し絵が多く、生徒が興味を持ちやすい、巻末付録の「心情円」は、デジタルコンテンツでもあり活用できる、との推薦点がある。ただ、教材の始まりが右からではない場合があるため、使いづらいとの課題点もある。

教出は、現在中学校で使用している教科書である。写真や挿し絵が大きく、効果的にレイアウトされている、各学年の教材のバランスが良いとの推薦点がある。ただ、各教材のはじめにある問いかけが単調に感じるという課題点もある。

光村は、生徒に身近な内容が多く、自分のこととして考えやすいことや、人権学習・保健につながる教材が掲載されているという推薦点がある。ただ、3年生の教科書に使われている挿し絵が暗く感じるとの課題点がある。

日文は、以前からある資料と新しい内容の資料のバランスが良い、いじめとよりよい社会を考えるというテーマで、複数の教材がユニットで掲載されているのがよいという推薦点がある。ただ、物語的な教材が多いため、様々なバリエーションがある方がよいとの課題点もある。

学研は、イラストや写真が綺麗で、教材の内容理解につながる、常に教材が右ページから始まっているという推薦点がある。ただ、字が小さく、情報量が多いという課題点もある。

あか図は、定番の教材が多く、内容項目について考え、深める学習をしやすく、また、教材の最後に考え方を示し、自分自身と対話するような流れになっているという推薦点がある。ただ、全体的に文章が長く、読み物教材が多いため、学習が単調になるのではないかと課題点もある。

日科は、写真や挿し絵、漫画が多く、生徒の興味を引きやすく、また、巻末に掲載されているウェルビーイングカードは斬新である、などの推薦点がある。ただウェルビーイングカードは、どう活用するのかわかりにくいという課題点もある。

(柴崎委員)

道徳の学習についてはやはり教材が非常に大きなウエイトを占めると思う。子どもたちの深い学びにつながると考えられる教科書はどれか。

(選定委員長)

調査員の調査研究では、子どもたちが1年間、興味・関心を持ちながら道徳的価値を深められる内容の教材を扱っているかどうかをポイントとしていた。その観点で、教出、光村、日文、あか図の4者が充実しているとの報告を受けている。

選定委員会においても道徳の教科書は、教材が重要であるという認識で議論を進めて、先述の4者が、阪南市の子どもたちにはマッチしており、推薦できると考えている。

(辻委員)

教出、光村、日文、あか図の評価が高いとのことだが、学校調査においては、東書が上位に評価されている。東書は、どの点が評価されているのか。

(選定委員長)

学校評価では、漫画や挿し絵などが効果的に配置されていることや、大判で見やすいこと、更には、身近な問題や歴史的な問題に触れており、指導内容を

深められるなどについて評価されている。この点は、調査員調査でも挙がっている点であった。

ただ一方で、発問が3つ設定されている教材があり、生徒の実態に合わせて使いづらいのではないかと、設定されている中心発問が内容項目に迫りにくいのではないかと意見もあった。またワークシートが用意されているが、多様な考えを引き出したり、深く掘り下げたりする場合には使いにくいのではないかと意見もあった。東書については、漫画や挿し絵など興味を引きやすく、生徒にとって見やすくわかりやすい点や、掲載されている教材も良いものがあると評価したが、実際の学習場面での活用を考えると、先述の教出、光村、日文、あか図の4者の方が推薦できるという結論になった。

(教育長職務代理者)

教出、光村、日文、あか図の4者で見ると、「いじめ」や「情報モラル」など、子どもたちに身近で、考えさせたい内容についてどのように取りあげられているか。

(選定委員長)

「いじめ」については、4者ともにコーナーのように教材をまとめて掲載している。

まず、教出は各学年で2つの教材を取り扱い、それぞれの教材の後に、自分で考えを深めるように「ひろば」が配置されている。

光村も各学年で2つの教材を掲載している。各学年1つずつ「まなびをプラス」のコーナーがあり、自分の考えを深めるようになっている。

日文は、1年生で6つ、2年生で5つ、3年生で4つの教材を「いじめと向き合う」というユニットとして取り扱われており、他教科などに関連させて視野を広げるコラムも用意されている。

あか図は、1年生で3つ、2・3年生ではそれぞれ2つの教材が掲載されており、1年生には教材の後に内容を広げ深めるコラムがある。

情報モラルについてはコーナーにしている発行者や「いじめ」と関連づけている発行者など、取り上げ方に違いがある。

まず教出は、教室は、各学年で1つの教材を取り上げ、そのあと「ひろば」で情報モラルについて考えるという流れになっている。

光村は、「情報モラルについて考える」というユニットにして、1つの教材と「まなびをプラス」の2つで考えを深めるという流れである。

日文は、「いじめ」と関連づけながら取り扱う教材に加え「情報の広がり」や「AI」についても触れる教材、コラムが充実している。

あか図は、1年生で3つ、2・3年生ではそれぞれ2つの教材が掲載されており、1年生と3年生には、教材のあとに内容を広げ深めるコラムがある。

「いじめ」「情報モラル」については、日文、あか図が多く取り扱ってお

り、次いで教出、光村となる。ただ、子どもたちの日常で起こり得る身近で考えやすい教材の内容や授業での流れを考えると、教出と日文が充実していると考ええる。

(柴崎委員)

それぞれ「情報モラル」や「いじめ」について説明があったが、それらも含めて4者の差について説明を求める。

(選定委員長)

3人の調査員の中でも非常に評価が割れるほど、上位4者には差がなく、選定委員会でも非常に議論が白熱した。最終的には掲載されている教材のバランスや、学年ごとの教材の配置などを全体的に評価して、最も推薦する発行者は教出、そして光村、日文、あか図が差がなくそれに続く最終的には判断した。

(教育長)

教出を1位に推薦する理由について、もう少し詳しく教えてほしい。

(選定委員長)

各者とも掲載されている教材がよく、非常に難しい判断ではあったが、部分的に各者の課題点が挙がった。

まず、教出は、現行の教科書であるが、新たに追加された教材が少なかった点が指摘されている。ただ現在使用中でよい教材と考えるものは残っており、アップデートされているという捉えもあった。

光村は、教材のタイトルのすぐ横に、内容項目そのものが記載されているが、生徒の考えを方向づけることにつながるのではないかと、また、写真や挿し絵などはやや単調に感じるという課題点がある。

日文も教材のタイトルの横に内容項目につながる記載があり、これも生徒の考えを方向づけることにつながるのではないかとという点や、全体的に字の大きさが小さい点、物語的な内容が多いなどの課題点が挙がった。

あか図は内容項目に沿った教材ではあるが、中学生にとって、ややかたい内容が多いこと、全体的に文字数が多い読み物教材が多く取り上げられており、学習のバリエーションが豊富ではないとの課題点がある。

これらも含め、総合的に検討した結果、阪南市の子どもたちにとっては教出が最もバランスが良く、大きな課題点もないことから、一番に推薦する発行者とした。光村、日文、あか図はそれぞれ特徴やよさがあり、甲乙つけがたく、差がないと考え、2番手に並んでいると考える。

(教育長)

確認だが、教出が新たに追加された教材が少なかったということだが、良い教材が残ったと捉えて、他の3者と比べて課題はなく、一番使いやすいということではいか。

(選定委員長)

そうである。

(柴崎委員)

現行も教育出版であるが、この後ろの「道徳科の学びを振り返ろう」は活用しているのか。調査員から何か話はなかったか。

(選定委員長)

選定委員会とか調査員報告では、ここについてはなかったように思う。

(事務局)

これについては特に学校調査でも意見は出ていなかった。各授業においては、ワークシートを自作するということがあるということであった。

(教育長)

それでは、道徳について採択する。改めて選定委員会から推薦する発行者は教出でよいか。

(選定委員長)

選定委員会として、最も推薦する発行者は教出で、次に、光村、日文、あか図が並んでいる。

(教育長)

採択する教科書は、教出でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、道徳の教科書は教出とする。

(教育長)

ここまで、ひと通り、選定委員会からの各種目の報告を受け、それぞれの種目において採択をした。今から採択した教科書について最終確認を行う。

阪南市教育委員会として令和7年度に使用する中学校教科用図書については、国語 東京書籍、書写 三省堂、地理 帝国書院、歴史 東京書籍、公民 東京書籍、地図 帝国書院、数学 数研出版、理科 東京書籍、音楽一般 教育芸術社、音楽器楽 教育芸術社、美術 開隆堂、保健体育 大修館書店、技術 東京書籍、家庭 教育図書出版、外国語 東京書籍、道徳 教育出版

以上16種目、今、読みあげたとおり採択としたいと思うが、どうか。

お諮りする。意義はないか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認める。令和7年度使用中学校教科用図書を、ただいま確認した通りに決定する。

#### ○小学校教科書の採択

(教育長)

では、続いて令和7年度に小学校で使用する教科書について採択する。別紙2をご覧ください。小学校の令和7年度使用教科用図書については、「令

和5年度に採択したものと同一の教科書を採択しなければならないこと」となっていることから、別紙の通り、令和5年度採択のものと同じものを採択したいと思うが、よろしいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認める。

小学校の令和7年度使用教科用書については、別紙の通り、令和5年度採択のものと同じものを採択することとする。

以上で、議決事項第1号 令和7年度使用義務教育諸学校教科用図書の採択についてはすべて議決された。

#### ◆議決事項第2号「その他について」(学校教育課)

(教育長)

続いて議案の2その他について、何か議決を必要とするものはないか。

(全委員)

なし。

(教育長)

ないようなので、これで、第4回臨時教育委員会を閉会する。

以上